

## 「第9回市民参加懇談会」 第1部 議事録

日時：2004年10月29日（金） 13：30～15：25

会場：IMPホール（大阪府中央区城見 1-3-7 松下IMPビル）

### 【事務局】

本日は、「第9回市民参加懇談会」にお越しいただき、誠にありがとうございます。まもなく開会いたしますので、お席についてお待ちください。開会に先立ちまして、いくつか注意事項を申し上げます。

携帯電話をお持ちの方は、電源をお切りいただくか、マナーモードにお切り替えの上、通話をご遠慮ください。会場内でのおたばこ、飲食はご遠慮いただきますようお願いいたします。

後ほど、会場の皆さまからご意見をおうかがいする時間をおとりしますので、司会の合図があるまでは、ご発言はご遠慮ください。議事進行の妨げとなる発言や行為が認められた場合には、ご退席をお願いすることがございます。

本日の「第9回市民参加懇談会」は、公開のもとで開催いたしますので、参加者の皆さまのほか、報道関係者の方々にもお越しいただいております。ニュース報道などで映像を使用されることにつきましてご了承いただきたく存じます。また、録音、写真撮影、ビデオ撮影はご遠慮いただきますようお願いいたします。

お配りした資料の中にアンケートがございます。お帰りの際にご記入いただき、係りのものにお渡しいただければ幸いです。その他、何かご用がございましたら、お近くの係員までお申し付けください。開会までしばらくお待ちください。

それでは定刻となりましたので、「第9回市民参加懇談会～核燃料サイクル政策に関してご意見を述べていただく場として～」を開会させていただきます。

まず、はじめにご意見を頂戴する方々をご紹介します。大阪府からお越しの飯田秀男さん、大阪府からお越しの池島芙紀子さん、福井県からお越しの石黒順二さん、大阪府からお越しの小林萬智子さん、大阪府からお越しの佐藤大介さん、大阪府からお越しの中尾佳世子さん、福井県からお越しの中嶋哲演さん、どうぞよろしくお願いいたします。なお、第1部でご発言いただく予定でした阿部伸一さんにおかれましては、ご体調が不良とのことで、ご欠席の連絡を頂いております。

続きまして、原子力委員会市民参加懇談会のコアメンバーを紹介します。本日、司会・進行をしていただく科学ジャーナリスト、中村浩美さん、消費生活アドバイザー、碧海西葵さん、生活情報評論家、井上チイ子さん、WIN-Global、WIN-Japan 会長、小川順子さん、ジャーナリスト、東嶋和子さん、九州大学大学院教授、吉岡齊さん、最後に市民参加懇談会座長である木元教子さん、それではこれより先は木元座長、よろしくお願いします。

【木元原子力委員】

今日は多数ご参加いただきまして、本当にありがとうございます。

今日は、市民参加懇談会をこの大阪で開かせていただくわけですが、市民参加懇談会は、コアメンバーを中心に形成されております。

お手元の資料４に、「市民参加懇談会の活動について」がございます。そこに設置の趣旨も書いてございます。３年前に、原子力委員会は市民との窓口を開かなければいけないということで開設いたしました。

どこで、どういうふうに市民参加懇談会をやるかということですが、当時、ブルサーマルを導入する、しないで住民投票が行われました刈羽村にまいりました。それが１ページの「２．これまでの活動」に書いてございます。

ここにありますように、いろんな立場のメンバーがコアメンバーに入っておりますけれども、原子力政策策定への市民参加の拡大をめざすということを掲げまして、開催させていただいております。今日の第１部で発言していただく方は、ご意見を頂戴した方々の中からコアメンバーが選ばせていただきました。女性の比率とか、地域とか、そういうことを考えながら、ご参加いただきました。

その方々に発言していただくのが第１部で、第２部では、会場からご意見を頂戴する。そういう企画なども、コアメンバーがさせていただいております。

今日１０月２９日に大阪で開催するというのも、コアメンバー会議で決まりました。実はその後、大変残念なことなのですが、美浜発電所３号機で蒸気が噴出して人が亡くなるという事故が起きました。大阪でやるならば、そういうことに関しても意見を言いたいという方もございました。

今、原子力委員会が５年ぶりに改正する長期計画、新計画を出そうということで会議を開いております。その過程で、ご意見を多くの方々から伺う形もっております。政策策定のプロセスに反映させるということです。今日は核燃料サイクルをテーマにというプランだったのですが、美浜の事故がありました。これも原子力に関係あることですので、ご意見があれば頂戴したいという形にさせていただいております。そういう企画もこのコアメンバーがいたしております。

それで、１回目は、さっき申し上げましたが、この１ページに書いてありますように、平成１４年の１月に刈羽村でやりました。「いま、原子力発電に求められているものは何か」。

２回目は東京で、「原子力政策決定のプロセスと市民とのかかわり」。原子力政策を策定する際にどういうふうに市民はかかわれるのだろうか。あるいは、かかわっていけるのだろうか。そういうことについてご意見を頂きました。

次のページをおめくりいただくと、裏になります。これも市民参加懇談会 in 東京と書いてございますけれども、「知りたい情報は、届いているのか」をテーマに開催しました。

東京電力の不正記載の問題がございました。この場合、情報公開はどうなんだろうかとということで、情報公開を中心にご意見を頂きました。

4 回目は青森に行きました。これは、核燃料サイクルを考えるということで、六ヶ所の話が中心になったのですが、やはりここでも、市民の中には知りたい情報が届いていないという声が多かった。ここでも、情報公開とはどういうものかということについてご意見を頂きました。

5 回目は敦賀にまいりまして、「原子力と地域社会」ということで、原子力が地域にもたらすプラスとマイナスを考える。こういうテーマでご意見を頂きました。

6 回目が平成 15 年の 10 月ですが、埼玉。これは東電の不祥事がございました時で、停電するのではないかとということで、電力危機が言われたのですが、幸いというか何と云うか、冷たい夏でしたので、停電はありませんでした。電気の消費量も少なかったのです。実は、これで愕然としたことがありました。私たちは埼玉で、停電しなくてよかったですねと言っていたのですが、その後に福島に行きました。そこで、あなたたち消費者は停電しなくて良かったと言っているけれど、福島では冷夏で農作物がとれなくて大変だったんだよ、という話がありました。ここでも生産者と消費者のギャップを感じた次第です。

7 回目が 2 ページの終わりに書いてあります。このころから、長期計画へのご意見をいただくということで、平成 16 年の初めから、この長期計画に関していろんなお考えをいただく場をつくっております。市民参加懇談会でもその場所をつくり、まず、銀座で開催しました。475 件のご意見が寄せられ、その中から選ばせていただいて、9 名の方のご発言をいただきました。第 2 部では、手をあげていただいて、会場の 11 名の方からご意見をいただきました。

その次は市民参加懇談会 in 福島・ふたばで、3 ページの頭に書いてございます。これは今年 5 月 22 日、福島県の双葉でやりました。そして、先ほど申し上げたような生産地と消費地の温度差をここでも感じたわけです。福島は敦賀と同じくらい長い間、32 年間、原子力発電とともに生きている所です。

そういうわけで、今日は 9 回目の市民参加懇談会になります。この場でも、先ほど申し上げましたように、いま論議をしております核燃料サイクルについて、ご意見をいただきます。

横長になっております資料 2 をお開きいただけますか。ここにいろいろ書いてございます。あとでお読みいただければと思いますが、1 ページの「2. 策定状況」、いま何をやっているかということが書いてございます。「長計についてご意見を聴く会」を本年 1 月から延べ 16 回やりました。市民参加懇談会も先ほど申し上げましたように開きました。

6 月 15 日に、原子力委員会が、新計画策定会議の設置と今後の進め方を決定いたしました。第 1 回の策定会議を 6 月 21 日に開催いたしました。後の方にメンバーなどが書い

てありますので、見ていただければ幸いです。策定会議の委員は全部で32名おります。

原子力長計の中で、どれからやろうかといった時に、核燃料サイクルとして再処理をした時にバックエンドコストとして18.8兆円かかるという報道がありました。もう一度これを見直した方が良いのではないかと、という声もだいぶ寄せられました。そこで、核燃料サイクル政策に係わる政策評価から着手しました。策定会議は今も粛々と行われており、11月1日に11回目を開くことになっております。

あとでこれをきっちりご覧いただければ幸いなのですが、2ページ、3ページを開いていただきますと、3ページの方に4つのシナリオが囲みの中に書いてございます。最初に書いてあるのが、全量再処理して核燃料サイクルをまわしていくという考え方で、現行の政策の考え方です。

2つめが部分再処理です。六ヶ所再処理工場の能力で年間800トン処理できるんですが、発電所からは全国で900トンほど出てますから、あと100トンは余ります。だから100トンはどうするかという話なんですが、それを中間貯蔵しておいて、後で直接処分しようという案です。これが2つめ。

3つめは、いやいや、再処理は全くしないで、使用済燃料は全部直接処分しようという考え。

そして4番目のシナリオは、当面、出たものはとにかく中間貯蔵を続けましょう、そして、その後直接処分か再処理かを適切な時期に考えようということで、この長期計画の中では政策決定をいたしません。

この4つの案を仮想的に考えました。

これをどのように評価するかの視点をいろいろ出してみました。これが左側のページにあります10項目です。これを4つのシナリオにあてはめて、それぞれ考えました。安全の確保。エネルギーセキュリティ、これは資源の節約、供給安定性です。それから環境に適合しているか。経済性はどうか。これは直接処分の場合もちゃんと計算させていただきました。直接処分すると、こういうことが起こる、これはできる、これはできない、ということです。それから核不拡散の問題。技術的成立の問題。社会的受容はどうかという問題。それから選択肢、柔軟性はどのように確保されるだろうか。それから、もし政策変更とした場合の課題はどんなものがあるだろうか。海外の動向はどうか。この10項目にあてはめて、それぞれ評価を行いました。今そういうことを行って、論点整理に入っている段階です。

ですから、まだ政策の決定はいたしておりません。一部の報道でもう決まったようなことが書かれていたようですが、原子力委員会が決めたという事実はございません。

今日の市民参加懇談会はその流れの中で行われるということでございますので、よろしくお願い申し上げたいと思います。以上、現状をお話した上で、皆さまのご意見を頂戴さ

せていただくことにいたしております。

今日の司会・進行は、中村浩美さんをお願いしておりますので、バトンタッチいたします。中村さん、よろしくお願いします。

【中村委員（司会）】

本日、司会・進行を担当いたします中村浩美です。よろしくお願いいたします。

それでは、さっそく第１部、ここにお座りいただいている皆さまからご発言をいただくのですが、その前にご案内を申し上げます。資料１というのが、皆さんお手元におありだと思います。今回の市民参加懇談会に際しまして、お寄せいただいたご意見を全部ここに収録させていただきます。１１７件頂戴しました。なお、こちらの方には、ご意見と住所、年齢、性別は書いてございますけれども、お名前は記載してございません。ナンバーのところに、「Ｆ」とか「Ｅ」とか「ゆ」とかいう記号がついてございますけれども、「Ｆ」というのはＦＡＸでいただいたご意見、「Ｅ」というのはＥメールでいただいたご意見、「ゆ」は郵送でいただいたご意見ということです。

本日ここにご出席の発言者の皆さまには、先ほど了解をいただきましたので、皆さまにご理解いただく便宜のために、これから発言される方がこのご意見集の中の何番かということをご紹介いたします。このご意見集の方もご覧になりながら、お話をお聞きいただきたいと思います。

さっそく、私の左手、中嶋哲演さんからお願いするのですが、皆さんは会場にお入りになる時に、このブルーの紙がございましたのをお気づきになられましたでしょうか。これは中嶋さんがご自分でお持ちくださった、ご自身の資料でございます。どうぞ、これも参考にご覧いただきたいと思います。ご意見集でいきますと、中嶋さんのご意見はＦＡＸでお寄せいただいた５２番です。Ｆ５２番が中嶋さんから事前にお寄せいただいたものです。さらに修正も含めて、今日、このブルーの紙をお持ちくださいましたので、こちらもお覧いただきながら、ご発言をお聞きいただきたいと思います。

最初のワンラウンドは、皆さんから５分くらいをめに、ご発言をいただきたいと思います。

お待たせいたしました。それでは中嶋さん、どうぞ。

【中嶋哲演氏】

ご紹介いただきました中嶋です。若狭の山寺から出てまいりまして、このビルの会場に入り、しかもトップバッターということですので、緊張しています。できるだけルールは守りたいと思っておりますが、よろしくお願いいたします。

福井県在住と紹介されていますが、１５基の原発がある若狭の住民であります。そのど真ん中の町の小浜市民であります。巨大大飯原発４基から２０キロ弱の山寺の住職をしております。先だって、西川知事さんが、若狭の原発が生み出している電力は、このとこ

る毎年 900 億 kWh だとおっしゃっていました。ただ、西川知事がふれられなかった点をご紹介します。

その 15 基が立地している若狭の地域住民が年間消費している電力は、年間 12 億 kWh にしかすぎません。そして、そういう中で、小浜市はど真ん中の町なんです。1960 年代末から今日に至るまで、原発を拒み続けてきました。立地、誘致を拒んできました。そして、つい先だって、小浜市長選挙で、中間貯蔵施設反対を明確に公約された市長を誕生させました。そういうところから参っております。そういう小浜市民の生の声を、本当は紹介させてほしいんですけども、ぜひ、あとの時間でも、その時間を与えていただきたいと思います。

本題に入ります。本題に入って、最後に二つの提案をいたします。

そういう若狭の住民の一人として、ブルーのチラシにそって話をしてまいります。今回、策定会議で 4 つのシナリオが論議されて、今の時点で二つに絞られてきて、第 1 案と第 2 案があるようです。あまりどなたもご指摘なさらないんですが、現在、論議されているすべてのシナリオの共通の前提に、2050 年あるいはもう少し先かもしれませんが、その時期までの使用済み核燃料の発生量が、私の承知しているところでは約 6.6 万トンですが、想定されている。それを前提に中間貯蔵施設が 3 ないし 6 カ所、9 ないし 12 カ所が必要だとされています。右の注記もふれたいんですが、時間の関係で進みます。

初臨界から起算しますと、50 年時点で既存の 52 基の原発のうち、実に 49 基が 50 年ないし 70 年を超えます。想定されている発生量には、そういう老朽炉のものが含まれています。しかし、さすがにそれは気が引けたのかと思いますが、リブレイス、建て替えると言っている。更地にして建て替えるんでしょうか。そんなことが可能なのかどうもわかりません。まったく非現実的な想定で、私たちには仮想シナリオにすぎないと思えてなりません。新增設中の原発サイト内のプール容量は、設計に折り込み済みで、40 年分はたしか確保されているはずで。

このあいだ、西川知事がやかましく要望されましたように、そういう老朽原発の安全、管理こそ、今、喫緊の問題です。そんな 50 年先の問題ではありません。もし、こういう老朽原発が、先のような前提の下に運転強行されていくなれば、老朽化ですから、1 次系が特に汚染してまいります。それによって、中で働く労働者被ばくも増えます。放射線影響ニュースによりますと、原発被ばく労働従事者（被ばく線量登録管理制度発足以来の放射線業務従事者）の累計は今年の 3 月末で 39 万人に達しています。使用済み核燃料等を増加、累積させ、大事故の危険性、膨大な被ばく、超高コストをも招来しかねません。大地震、テロなど、複合した大災害も危惧されます。

それとは反対に、もし 2016 年頃までに原発停止ということが実現するならば、上記の巨大なリスクを免れ、再処理や中間貯蔵、それらに伴う高コストも不要となります。右

の記事をあとで参照していただきたいと思います。その政策変更に伴うコストは、単なる損失補填にとどまらず、あらたな方向転換への準備・支度の役割をも果たすのではないかと思います。

昨年夏、東京電力の全原発を停止しても停電がなかった。冷夏があったかもしれませんが。今夏の関西電力の同じような経験を徹底検証して、安全神話は崩れておりますけれども、原発必要神話の実態を究明する必要があると思っています。何よりもかによりも、省エネ、節電のさらなる具体化を、ここにおいで都市部の皆さんを含めて、真剣に考えていただきたい。

15基の集中立地、老朽原発の死傷事故、「もんじゅ」再開へ向けた執拗な動き、プルサーマルを強行せんとする動き、敦賀3、4号増設、そして中間貯蔵施設まで押しつけられようとしている若狭をはじめ、過疎辺境の地域住民に、いったい何人の人身御供を捧げさせれば、ここにおいで皆さんは飽き足りていただけるのでしょうか。

提案は二つです。危険、不安な仮想シナリオの案、これはやがて一つに絞られようとしているのかもしれませんが、それに対して、多くの国民の世論が、脱原発を望む意見が寄せられているはずです。安全、安心で希望へ導く、使用済み核燃料の発生量そのものを抑制する、一日も早く脱原発へ向かう仮想シナリオも、謙遜して仮想と申し上げておりますが、検討していただきたい。これまで数回、そちらの仮想シナリオは議論されてきたんですから、この仮想シナリオも、近藤委員長さん、ぜひ何回かかけて検討していただきたい。

それから二つ目。市民懇に限りません、策定会議の皆さんに来ていただくのが一番いいわけです。大量消費地の大阪市、京都市、神戸市は、関西電力の大株主の上位5位にランクされているはずです。ですから、少なくともこの三市でやっていただきたい。それから地元では福井、小浜。これはみんなの了承を得てきたわけではありませんが、福井は県都です。西川知事のお膝元です。小浜は現地です。現地といわれますと、原発を受け入れたところばかり言われますが、冒頭申し上げたような小浜の地域の実情も踏まえていただいて、原発を拒否し続けてきた地元住民の声も聞いていただきたい。そういう意味で、われわれも核燃料サイクルに対して関心を持つ必要がありますから、結論を出される前に聞いていただけませんか。

その二つのことをご提案いたします。

【中村委員（司会）】

ありがとうございました。最後のところは、関西の大きな消費地と、それから福井県各地でぜひ、この市民参加懇談会や他のご意見を聞く会などをぜひ開催してほしいということですね。

【中嶋哲演氏】

ぜひ、提案を検討していただきたいと思います。

【中村委員（司会）】

ありがとうございました。それでは、コアメンバーの皆さん、中嶋さんのご発言について理解を深めるために、懇談をしたいと思いますが、何かご質問などありますか。

小川委員、どうぞ。

【小川委員】

どうも、ご意見ありがとうございました。

私も6.6万トンの内容についてすべて検証しているわけではないので、中嶋さんが正しく理解しているのかどうかを確認するのも申し訳ないんですが、2046年までの使用済燃料の発生量は6.6万トンとここに書いてあります。その内容を考えますに、今ある発電所から出てくるのだということではなくて、日本の電力の中で原子力発電が40%ぐらいという想定の下に、2046年までに何億kWhでるから、それに対して原子力発電は何億kWh、だから原子力発電の使用済燃料は何万トンだと、こういう計算だと思うんです。今ある52基が、本当に2046年までそのままいっているというように、もし思っ  
てらっしゃるんだったら、それはたぶん誤解ではないかと思うんですが、どうでしょうか。

【中嶋哲演氏】

はい。ちょっとそこでふれましたが、最初にこの方では、私はリプレイスの問題にふれていませんでしたので、そういう誤解を受けたかもしれません。50年、70年の老朽炉を動かし続けることは不可能でしょう。私もその認識を持ってはおりますけれども、ただですね、6.6万トンの意味を、是非今日、ここにおいでの方々と確認したいんです。6.6万トンのうち、すでに52基の原発が今までに1.4万トンの使用済み核燃料を生み出しているんです。それは、間違っていたら専門家の先生方にご指摘いただきたい。

1.4万トンの使用済み核燃料というのは、その中に、広島原爆100万発分の死の灰を内蔵しているものなんです。そして、ある科学者のお話によれば、厳密に管理するならば、数万年、数十万年オーダー、100万年の管理を必要とするものなんです。ですから、例えば仮想シナリオとしても、その三倍にもなる6.6万トンの使用済み核燃料を想定するというようなことは論外の沙汰であると思っております。

【中村委員（司会）】

吉岡委員、いかがですか。

【吉岡委員】

簡単な補足説明をしたいんですけど、6.6万トンという数字は、原子力委員会の策定会議が出した数字ではなく、経済産業省の電気事業分科会が出した数字で、2046年までだったと思います。その40年間にけるバックエンドコストが18兆8千億円という、そういう数字を出しているわけです。



【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございます。まあ、何万トンにしる、中畠さんの指摘される主旨は分かりました。それでは、次の発言者をご紹介します。中尾佳世子さんですけれども、中尾さんがお寄せいただいたのは郵送の「ゆ」の7番でございます。ご覧いただきながらご発言をお聞きください。中尾さん、どうぞ。

【中尾佳世子氏】

大阪の中尾です。隣の中畠さんとは違いまして、私は都会の真ん中に住んでおります。先ほど、教えていただきました若狭で作られる900億 kWh ですか、その大部分を私たちの暮らしの中で、いわゆる都会の人間が使っていることだと思います。送っていただいております。

美浜の事故について、ちょっと最初に申し上げたいと思います。

まずはじめに、この事故によって亡くなられた方々のご冥福と、そして負傷された方々の一日も早いご回復をお祈りいたします。

事故の直後、テレビを見ておりましたが、まず放射能漏れがないことがニュースなどで報道されて、正直ほっとしたというところでした。しかし、多くの死傷者が出たことで、大変な事故が起きたのだなという感じを持っておりました。それから、10月に入りまして、美浜の方とお会いする機会がありましたが、事故後2カ月経っても、当時のショックを引きずっておられたようです。地元の方々はある意味、関西電力以上に当事者意識があって、それだけに心痛も大きかったのだなというふうに私は受け止めました。

特に今回の事故は、時間が経つに連れて、まあその当時からと言われていましたが、原因が明らかになるにつれ、管理されるべきところが管理されずに事故が起きた。関西電力には本当に弁解の余地がなく、大きな憤りを覚えております。

しかし、冷静に判断すれば、この事故は、原子力発電の技術とはちょっと異なる次元のことだったのだな、ということも明らかになりました。だから、今回の事故によって、美浜の中間貯蔵や、高浜のプルサーマルなどの原子力関連のプロジェクトが白紙状態になったと聞いたのですが、その時はなんか、釈然としない気持ちでした。大阪弁で言ったら「なんでやねん」という感じですね。

こういうエネルギーに関する事故ですが、大阪で言えば、昭和45年の天六のガス爆発事故、昨年の法善寺横町のガス爆発事故がありました。いずれも死傷者が出ましたが、大阪に住んでいる私たちの足下にはガス管がいっぱいあります。危険は常に私たちの身の回りにあるわけですね。でもそのことを日常的に心配する人はほとんどおりません。私もしておりません。同じ死傷者が出たような事故でも、原子力に対しては、社会の非常に厳しい目があるということです。それが日本という唯一の被爆国における原子力の宿命だと思う一方で、関西の半分以上の電力が原子力によってまかなわれている、支えられるという

現実も、もう少し私は冷静な目で見ていく必要があるのではないかと考えます。

ところで、今年は地震や台風など、記録的な多さの自然災害が日本を襲っております。そして、多くの死傷者や被害者がでております。今この時間も、新潟では多くの方がおびえながら暮らしておられることと思います。また、長岡をはじめとする、台風や水害の被害者も同じです。しかし、国などの防災措置に対する批判は、被害の大きさに比べて小さいような気がします。

それはですね、人々のリスク、いわゆる危険とか、リスクに対する感じ方や捉え方が、自然の災害や自己の選択によって生じるリスクに対しては怒りは小さく、寛容であるということ。そして、科学、あるいは押しつけられた、社会から押しつけられたものに対する災害に対しては、怒りは大きく、非常にシビアなものがあるというふうに感じます。

今の暮らしを続ける限り、現時点でのエネルギー源として原子力の選択は、私は避けられないと思っております。原子力に関わる事業者や国の方々は、いわゆる人々のリスクに対する感じ方をもっと研究し、分析し、日常の広報に生かせるような努力が必要ではないかなと思っております。

また、核燃料サイクル政策につきましても、私が思いますのは、難しいことは分からないのですが、問題の原点は単純なことだととらえております。現在も、いわゆる将来に渡って、日本は資源の非常に少ない国だと私は思っておりますが、その資源の少ない日本に暮らす私たち自身が、これからの生活をどうするかということがすべてだと思います。

また、原子力が将来に渡って唯一無二のエネルギーとは決して考えておりません。むしろ、安全で安く、効率的な発電方法が開発されれば、それを選択することは本当に明らかなことです。誰もが安定したエネルギー供給の必要性を感じ、今、その多くを原子力によって享受しているのが現実です。現時点における最善の選択肢として、その代替となる新しい技術が確立するまで、原子力を選択するのは当然の帰結だと私は思っております。現在、将来を見据え、現実を冷静に直視することが大切ではないでしょうか。

化石燃料は無尽蔵ではなく、また石油などは、発電で消費してしまえば、燃やして終わりです。でも、今では衣料や化学繊維をはじめ、あらゆるところで利用される貴重な資源です。有限な資源を少しでも長く、有益に使うことが、人間の英知であり、省資源化、省エネルギー化の努力として、リサイクルはいまや生活の中でも日常的な考えとして、浸透しているのではないかと思います。そういう意味ではウラン燃料は使用後もリサイクルができる資源として、多くの価値が残っていると聞いています。大変、扱いが難しく、取り扱いを間違えれば、きわめて有害な放射能を出す物質であることは踏まえておりますが、なおそのことを考えても、リサイクルのもつ意味は大きいと考えます。核燃料サイクルの実用化に向けた研究開発に当たっては、安全を最優先に進められることが大前提であるの言うまでもないことです。いただいた基本シナリオの中で、3番目の全量直接処分とい

う選択肢がありましたが、これはそのリサイクルということからすれば、どういう観点でできたのかな、というふうにも思いました。

そして、今までの話の繰り返しになりますが、リサイクルの考え方は日常的なものとして浸透しております。ゴミの分別回収、使い捨てカメラやペットボトルなどの回収に加えて、特定電化製品はすでに有料です。自動車も、まもなくリサイクル料金の支払いが必要になります。そういう意味では、核燃料サイクルを行う場合、あるいはしない場合の費用試算が先ほど公表され、標準世帯の電気料金の年間負担額が600円から840円の差が出るとのことですが、この額が高いか安いかは、ちょっと私には分かりません。でも、ここでもいえるのは、私たち自身の現在の生活、さらには将来の生活、言えば子や孫のもっと先のことにつながるのかもしれませんが、将来の生活をどういう環境にするかということの選択がもう迫られているというか、その選択が原点ではないかと考えます。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございました。碧海委員、どうぞ。

【碧海委員】

先ほどの中嶋さんのご発言にもありましたように、立地と消費地とのアンバランスというか、そういう問題がありまして、例えば、中尾さんは、大阪の都市に原子力発電所を作るとのことについては、どういうふうに思われますか。

【中尾佳世子氏】

そういう環境が整えば、私は別にいいと思います。それはゴミとか、下水処理とか、そういうこともみんな同じだと思うんですね。

【中村委員（司会）】

それでは次の発言者をお願いいたします。

佐藤大介さんです。佐藤さんはEメールでご意見をお寄せいただきました。Eの24番が佐藤さんのご意見です。参考になさってお聞きいただきたいと思います。佐藤さん、どうぞ。

【佐藤大介氏】

「ノーニクス・アジアフォーラム」というアジアの反核、反原発のネットワークの日本事務局の佐藤といいます。

プルトニウムはエネルギーとして有効に利用できないということが世界的にはっきりしてきた現在、再処理工場をなぜ運転するのか、その理由の曖昧さ加減は、ブッシュのイラク攻撃に匹敵します。利害関係のある人たちが大きな声で「正しいのだ」、「とにかくやってしまえ」と言っている。後になって、「いやあ、やっぱりプルトニウムは利用できませんでした」となるわけです。プルトニウムが余ったら、核拡散問題で都合悪いからプルサーマルで燃やす。プルサーマルで使うから、またプルトニウムを取り出す、なんていうのも

相当変だと思います。子どもをだますこともできないと思います。進めたい人たちの本音は、原発の使用済燃料を、青森へ持っていきたいということだと思います。10月22日の新計画策定会議でも、委員会の事務局が、政策変更した場合、原発が基幹電源として維持できなくなる可能性があると言ったそうです。使用済燃料を青森へ持っていくための再処理工場なんだというふうに、青森の人たちにはっきり言うべきだと思います。そして、それに何十兆円もかけるとは、あまりにも愚かな政策だと思います。

さて、再処理工場の技術的な危険性や経済的な問題が、これまでさんざん指摘されてきたにもかかわらず、新計画策定会議は理性的な判断を示すことができないと思います。

今日、私は再処理工場の政治的な問題点について指摘します。

1994年、北朝鮮の核開発をめぐってアメリカは北朝鮮を攻撃する一歩手前まで行きました。2003年、多くの国々の反対にもかかわらず、アメリカはイラクを攻撃しました。今後、北朝鮮の核開発をめぐって、アメリカが北朝鮮を攻撃することはあり得ることです。第2次朝鮮戦争が起きたら、多数の原子力発電所を抱える韓国と日本も、甚大な被害を被る可能性があります。戦争は絶対に避けなければいけません。北朝鮮の核開発を凍結させる最も現実的で有効な方法は、昨年より3回にわたって行われている六者協議です。六者協議を進展させなければなりません。韓国の過去の核開発、核関連実験が六者協議の進展を阻む理由、口実にされなければいいと願いますが、同様に日本のプルトニウム政策が、進展を阻む理由、口実とされないかと心配です。北朝鮮が、日本の再処理工場や高速増殖炉計画を核開発につながるものとして問題化したとき、その主張は孤立するとは限りません。韓国や中国の民衆が同調し、一気に政治問題化する可能性があります。もし私が金正日ならば、タイミングを選んで必ずこのカードを使います。アジア諸国の人々は、過去の経験から日本の軍事大国化を本当に心配しています。警戒しています。中国でのサッカーアジア大会でのブーイングは記憶に新しいところです。また、数年前の韓国の新聞社の世論調査によると、「北朝鮮が核兵器を持つならば、韓国も核兵器を持つべきだ」という人よりも、「日本が核兵器を持つならば、韓国も核兵器を持つべきだ」という人の方が多かったそうです。

1993年から、毎年各国もちまわりで開催されてきたノーニュークス・アジアフォーラム、ここにはアジア10カ国の反核、反原発の人たちが集まります。そこにおいても度々、アジア各国の参加者から、日本のプルトニウム利用政策は核開発につながる懸念がある、つながるのではないかと批判されてきました。外国から日本はどう見られているのか、果たして信用されているのか、皆さん、ぜひそれを考えてみてください。米英仏露中、核保有五カ国以外に、インド、パキスタン、イスラエル、南アフリカ、リビア、イラン、最近でも韓国、台湾、ブラジルなどで、核開発疑惑がありました。あるいは開発されました。核拡散は現在もっともホットな国際的問題です。世界は混乱しています。核拡散問題は、

残念ながらしばらく続くでしょう。

日本は被爆国だし、非核三原則がある、日本は核開発しませんと言っても信用されません。つい2年前、当時の安倍官房副長官、福田官房長官が、日本は核兵器を使用してもいい。非核三原則の見直しもあり得ると発言したじゃないですか。I A E Aの保障措置だ、保障措置協定だ、追加議定書だ、といっても信用されません。みんな、I A E Aのことを聞かないで核開発をやっています。現在のI A E Aは日本やオーストラリアなどを、核開発の懸念のない国としていますが、ウラン濃縮工場、再処理工場、高速増殖炉、R E T F、核保有五カ国以外でこんなに揃えているのは日本とインドしかありません。外国から見たら怪しいわけです。日本の再処理工場が北朝鮮によって六者協議を進展させない理由、口実とされることは十分考えられます。そして、北朝鮮の思惑がはずれ、アメリカとの駆け引きがこじれたときに、六者協議がうまくいかなかったときに、アメリカが北朝鮮を攻撃する。1994年には、日本に有事法制がなかったから、戦争にはならなかったわけです。今は有事法があります。もしケリーが大統領になったとしても、アメリカは戦争をします。戦争はアメリカの公共事業だと思います。第2次朝鮮戦争を絶対に起こしてはなりません。

千歩譲ります。六者協議が進展し、北朝鮮の核開発が凍結されるまで、再処理工場の運転とそれにつながる試験は行わないでください。東北アジアの平和のために。新計画策定会議でこのことについて、十分な議論が行われているとは思えません。ぜひ、日本のプルトニウム利用政策が、対外的にどのような影響をもたらすか、様々なケースを想定した議論を行うよう、強く要望します。以上です。

【中村委員（司会）】

ありがとうございました。佐藤さんのご発言でした。コアメンバーの皆さん、いかがですか。小川委員。

【小川委員】

佐藤さんの再処理に対しての軍事利用へのご懸念というのは、今のご意見でよく分かりました。ところで、佐藤さんは、日本のエネルギーの供給については、反原子力、エネルギーも含めて反原子力だと思うんですけれども、エネルギーの供給についてはどのような未来像を描いてらっしゃるのでしょうか。

【佐藤大介氏】

エネルギーはですね、世界的には今主流なのは天然ガスになってきていると思います。非常に熱効率がいいので、天然ガスが主流だと思います。今後は燃料電池の開発とか、省エネ、あるいは様々な自然エネルギーですね、そういったことになっていくのではないかと思います。原子力エネルギーというのは未来がありません。

【木元原子力委員】

ちょっと一つだけいいですか。佐藤さんのご懸念、承ったんですが、佐藤さんご自身は、日本は核兵器を作ると思いますか。

【佐藤大介氏】

作りたい人がいっぱいいるように見受けられますけどね。

【木元原子力委員】

日本の国民が許すと思いますか。

【佐藤大介氏】

許したくないですね。

【木元原子力委員】

許さないと思います。原子力委員会も、きちんと原子力基本法で書いてあります。平和利用に徹するとありますし、やっとIAEAもちゃんと認めているわけです。先ほどの安倍さんたちの件については、私は抗議をしました。

【佐藤大介氏】

ぜひ頑張ってください。

大阪には西村慎吾衆議院議員とか、いろいろいます。

【木元原子力委員】

ちょっと面白い方がいますね。

【中村委員（司会）】

佐藤さんの東アジアの視点に立った日本の原子力というのは、やはり長期計画の中で、日本の原子力平和利用ということも当然うたうわけですが、あるいは研究開発ということもうたうわけですが、そういうときにやはり、配慮すべき視点、依って立つべき視点の一つを提示されたというふうに受け止めました。

【木元原子力委員】

皆さんにお配りした資料の中に、横長のA3（資料2 参考資料）があります。この中に、先ほど申し上げた10項目があって、大きくて恐縮ですが、その3ページ目の左側に、一番トップに「評価の視点」とあって、「核不拡散性」というのがあります。シナリオ1の場合、全量再処理する場合ということで書いてあります。そして、シナリオ2、シナリオ3、シナリオ4、これは後で読んでいただければよろしいんですが、シナリオ1のところで、今のご懸念に関することが書いてあります。最後の三つ目の「平和利用に限定することへの約束に対する国際理解の増進と核不拡散体制の充実を探索する努力、技術の改良、改善、活動の維持が重要」と評価をここに書かせていただいております。

【中村委員（司会）】

佐藤さんのご懸念もあることですから、今後、長期計画を策定されるまでに、やはり市

民の意見を反映した議論を進めてくださいというのが佐藤さんのご意見だと思います。

【木元原子力委員】

はい、この件については、これまでも議論してきました。

【中村委員（司会）】

さらにというご意見かと思います。

それでは、続いてのご発言者をご紹介します。小林萬智子さんですけれども、小林さんも郵送でご意見をお寄せいただきました。「ゆ」の4番というのが小林さんのご意見です。参考になさってください。それでは、小林さん、どうぞ。

【小林萬智子氏】

私も電力の大量消費地である大阪から参りました。一消費者としてのお話しかできませんが聞いていただきたいと思います。

今年は毎週のように台風が上陸し、それに大震災がありました。新潟の方々、とても困窮してらっしゃると思います。私も10年前に阪神大震災を経験しているんですけれども、ライフラインがストップして、半日以上、水も電気もガスも何もない中で、不安な日々を過ごした経験があります。半日後に一番初めに電力が回復しまして、パッと明るくなった途端にほっとしたことを、今でも鮮やかに覚えています。それだけに、今度被災された方々、本当にお気の毒だな、不安な日々を過ごしてらっしゃるなと思って、身につまされる思いがします。

日常の私たちの生活は、今、スイッチ一つ入れますと、パッと家中明るくなります。コンセントを差し込むだけで温かいお湯が沸き、ご飯もできますよね。それにパソコンだって、この頃は24時間、インターネットをつなぎっぱなしというのが流行っているそうです。一步外へ出ますと、金融機関のATM、CD機、これはもう年中、どこにいましてもお金を引き出せるわけです。まあ、手数料がいるとか細かいことはありますでしょうけれども。それと、24時間営業のコンビニが、国道なんかにはズラッと並んでおりまして、煌々としていて、お休みってことがないですよ。私たちの生活というのはまわりに電化製品があふれていて、それに情報やサービスも電力によってまかなわれている。

私たちの生活というのは電力に依存しきって成り立っていると思わざるを得ません。右肩上がりに電力は、どんどん需要が増えていっているらしいですが、石油をはじめ、化石燃料というのは無尽蔵ではありません。限りがあるものです。

おまけに、中東情勢とか、中国の台頭とか、いろんな国際要因が加わってきてまして、価格が安定しない。つい最近まで、原油価格はずっと値上がり続けておりました。今朝のニュースで、何カ月ぶりに原油価格が落ちたということを聞きましたけれども、そういうふうに、エネルギー資源となる、電源となる石油が安定した価格で手に入らない。そういうことが続きますと、日本の国は自前のエネルギーを持ちませんので、いつも国際情勢に

振り回されることになると思います。それで私は、ぜひ、日本の国も自前のエネルギー電源を持つ必要があると思います。

自給率を高めるために、比較的経済効率がよい、安定的なエネルギー資源であるとされる核燃料サイクル利用、これは避けて通れない問題だと私は思っております。また、それを推進する一方で、この国の人々は、原爆から発していると思うのですけれども、核に対するアレルギー反応が非常に強いと思います。ちょっとしたこと、大変な事故もこの前ありましたけれども、そういうこともすべて、国民一般の方々のアレルギー反応に、すぐ出てきて、原子力反対というようなことにつながっていくと思います。

これは政府やその関係機関の方々にもお願いしたいのですが、原爆以来、何と申しますか、日本では恐いものをさわるような感じで、一般の方々には原子力、放射能、放射線、核というようなことは全部ふせられていて、専門の方々の間だけでの知識の共有というか、そういうことがあったのではないかなと思うんです。正しい知識を一般の方々にも分かるように、広報活動をもう少し頑張っていただきたいなと思います。新聞のコラム欄にもエネルギーの話というのがあります。私はときどき目を通して、「ああそうか、そうか」とうなずいているのです、そういうことをもっと大々的になさって、一般の方々にもっとわかりやすく広めていただきたいと思います。

それから、電力会社の方々、各電力会社がそうだと思うのですが、トップの方と現場との間の意思疎通をもっと風通しのよいものにして、現場のお考えがストレートに上に上がるように、組織を改編していただきたいなと思います。

それから、この核燃料サイクル政策というのは安全確保が大前提です。ですから、安全確保をしてから、いろんな自給率を高める努力をしていただきたいと思います。

核燃料サイクルにより、ウラン燃料の使用限度の年数が伸びると思いますので、その間に、次世代のクリーンなエネルギー、安定して低価格で供給できるようなそういうものを、ぜひ研究機関で開発して、確立していただきたいと思っております。以上です。

【中村委員（司会）】

ありがとうございました。小林さんのご意見でした。吉岡委員、どうぞ。

【吉岡委員】

一点だけ、お聞きしたいんですが、今日来られた方の多くの方が、日本人は核アレルギーだとおっしゃっているのですけれども、本当かなと、私は実は疑問に思っています。

その理由は、確かに１９６０年代までは、アメリカの原子力空母が来るとか、原子力潜水艦が来るとか、原子力潜水艦が放射能を漏らしたとか、そういう事件・事故が起きたら非常に敏感に日本人が反応をして、激しい社会的抵抗が起こった。これは客観的事実であります。だから、歴史家としては１９６０年代までは、日本人は核アレルギーが強かったということは証明できる。しかし、７０年代以降はどうなのかなと思います。むしろ日本



は世界有数の原発大国で、原発の数からいっても、密度からいっても、非常に多いし、軍事転用可能な核技術もいっぱい入れている。それに対して反対運動もあるけれども、それほど強いアレルギーとかそういうものではないような気がします。ですから、少なくとも70年代以降は、アレルギーが強いとか、核開発に対して反発が強いとか、そういうことではなくなっているとは私は認識しています。その辺どうでしょうか。

【小林萬智子氏】

卑近な例で申し訳ないですが、私の友人の中で何人か、癌にかかった患者さんがいらっしゃいます。その方たちに、「私は先生からCTなんとかっていうのを勧められているんだけど、放射線の出る、そういう検査方法とか治療方法をやって大丈夫なんだろうか」と言って、いまだに逡巡していらっしゃる方がおられます。私は「そんなことはないですよ。そりゃいくらか自然界にある放射線よりはたくさん浴びるかもしれないけれども、あなたの病状にとってはこれは必要な検査であり、必要な治療であるから、お医者様が勧めておられるんだと思うから、安心して受けられたらどうですか」と話すんです。

放射線の平和利用で、一番私たちの身近な医療の現場でさえそういうことがあったので、私はやはり今でも一般の方々の心底には、放射線に対するアレルギー、核に対するアレルギーというのは潜在しているんだなと認識しております。

【中村委員（司会）】

吉岡委員は学者で、歴史家だから、たぶんアレルギーという言葉を厳密に定義したくておっしゃったんだと思うんです。お聞きしていると、中尾さんが先ほど言われたのは、厳しい目にさらされている原子力というニュアンスじゃないかなと私は聞きました。今の話をうかがっているとアレルギーという言葉自体をどうだという必要はないと思います。放射線の平和利用も当然長期計画の中に盛り込まれる内容なわけです。それと小林さんが言われた「もっと広報活動を」、どうもその辺が根にあるのかなと思います。意外に国の方はいろんな広報活動をやっており、確かに書類もたくさんあるし、パンフレットもあるし、ビデオもあるんだけど、本当に必要な情報は届いているのかと。われわれ懇談会でも持っていたテーマなんですけれども、その辺のことを小林さんのご発言から感じました。碧海委員はずいぶんそういう活動もしていらっしゃると思いますが、碧海委員、いかがですか。

【碧海委員】

小林さんが言われた通りだと思うんですね。私はやはり、適切な情報提供とか、広報とか、ただ提供すればいいというものではないですよ。やっぱり、説明しなければいけない。そういうことが不足しているために、知らないから、やはり、怖い、嫌だというのは非常に多いと思います。もちろん、非常によく勉強してらして、知ってらして、嫌だという方もたくさんいらっしゃるわけですが、私たちが活動して、経験している限りでは、やはり

知らないから嫌、恐いという方が圧倒的に多いと感じております。

【中村委員（司会）】

井上委員、実際に関西に住んでいらして、福井の皆さんとの交流もありますよね。いろいろな活動をされて、そういう正しい知識、認識の普及というようなこともやってらっしゃいますけれども、今の小林さんのご発言をうかがっていかがですか。

【井上委員】

これはどうしても勉強しなければ暮らしができないというものではないわけです。毎日の暮らしの中では。だから、どこかで気づきのきっかけがあって、そこから理解を深めていくと思うんです。そうすると、最初の気づきのきっかけがどれだけあるかと言われたときに、よほど積極的でない限り、なかなか出会えないというのが実態だと思います。ですから、これから、より一人一人の生活圏の中に、それに関わる、そのことを知ることによって自分の今の暮らし、将来の暮らし、次世代の子どもたちのことへも意識を広めていけるような知識がどういう手法を取ったら入っていくかという、新たな広報の模索がいる。ちょうどその時期、転換期になっていると思います。やはり、明らかにこれまでのやり方のみでは、思いはいくらあっても届かないというのが現実です。

一つ、小林さんにお聞きしたいんですけど、小林さんはそういうことに興味を持たれた、今、もっと広報をとおっしゃるもとなる、勉強しようと思われたもとなるもの、何かきっかけとかあるのでしょうか。

【小林萬智子氏】

やはり、10年前の阪神大震災で被災しましたときに、とても恐ろしい思いと不便な思いをした経験があるんです。そこからいろんな公共機関のことを調べたり、エネルギーのそういう関係のところにあたりまして、それで今はちょっとはまっているかもしれません。知れば知るほど、そんなに恐くないんだということが、ちょっとずつですが分かってきました。紙一枚で防げる放射線もあるなんて聞きましたときには、目から鱗という感じがしました。それでお友達にも、進んで医療を受けなさい、ということをお勧めしたんです。間違った認識を、私たちも今まで持っていたと思います。そういうことから始まりました。

【中村委員（司会）】

ありがとうございました。

では、続いての発言者をご紹介します。石黒順二さんです。石黒さんも郵送でご意見をいただきました。郵送、「ゆ」の6番というのが石黒さんのご意見です。参考になさってお聞きください。石黒さん、どうぞ。

【石黒順二氏】

はい。福井県敦賀からやってまいりました、石黒でございます。よろしくお願いいたします。

私は原子力発電立地地域の住民の立場から、核燃料サイクルについて意見を述べさせていただきます。

皆さんご存じのように、日本は今日まで一貫して、核燃料サイクル路線を堅持して参りました。また、私ども福井県の関西電力高浜発電所のプルサーマル計画があったときも、国の方から再三再四、日本は資源の有効活用ということで、使用済燃料を使い捨てにしないで、それを再処理して、燃料にしてまた燃やしていくんだということを、耳にたこができるほど言われました。なんと申しましょうか、日本の核燃料サイクルにとって、プルサーマルは重要な政策の一つだということで、地元としても了承をしたわけでございます。

しかし、今回の新長計の策定会議におきまして、使用済燃料に関する４つのシナリオ案が出てきて、その中の一つに、いわゆる直接処分のシナリオ案というものがでてまいりまして、私も耳を疑ったというか、信じられないような気持ちになったわけでございます。

直接処分となりますと、青森県の再処理施設はいらない、プルサーマルはいらない、中間貯蔵もいらないと。いわゆる必要なものは、使用済燃料の最終処分地だけが必要ということでございます。そうしたら、その最終処分地を受け入れる自治体が実際に日本のどこにあるんだろうかと。そして、その長期的な監視体制とか、あるいはこのことに関して、いわゆる時間を含めて、きちんと見通しが立っているのかどうなのか。まあ、大変に疑問に感じざるを得なかったわけでございます。

日本の原子力政策におきまして、５年とか１０年の時間というのはあっという間に経ってしまうわけでございます。むしろ、日本の各発電所で大変深刻な問題になっておりますのは、いわゆる使用済燃料を搬出できなくて、どんどん貯蔵プールが大変窮屈になってきて、おそらく２０１５年過ぎぐらいには、日本のすべての原子力発電所の貯蔵プールが満杯になって、燃料交換ができませんから、原子力発電所を止めざるを得ないという状況になるのではないかなということでございます。

特にそのような状況になりましたら、私どもの地域は原子力が地場産業とまでいわれておりまして、地元の非常に大きな雇用、あるいは自治体の財政、あるいは地域経済ですね、これが大変深刻な状況を迎えるということです。今日まで国の政策に協力して、あげくはそういう状況になれば、われわれとしては、今までの国の原子力政策に大変大きな不信感を持ち、それに対する責任をどこに求めているのか、考えざるを得ないわけでございます。

私は、今、急務なのは、再処理もさることながら、いわゆる中間貯蔵施設の立地が特に急がれていると思っております。それに対して、直接処分というものは、余分な誤解を与えるのではないか、あるいは中間貯蔵施設だけで本当におさまるだろうか、というような心配事を与えるのではないか、そのことに大変危惧をいたしております。日本は、エネルギーが大変脆弱な国で、エネルギー自給率が４％ぐらいで、消費量は世界で第４位という

ことですね。そして、石油の埋蔵量が40年、天然ガスやウランとかは60年近くということで、いわゆる石油文明の世界は今世紀で終焉を迎えるわけですね。石油、ウランも今、大変高騰して、ウラン資源のコストなんて先行きが全く読めない状況であります。また地球温暖化防止会議、京都議定書ですね、日本はCO<sub>2</sub>の排出量の目標を達成するのは大変厳しい状況です。そうなりますと、石油とか石炭、あるいは天然ガスなど、化石燃料というのは抑制をしていかなければならない。そういう状況です。

そして今、佐藤さんがおっしゃられました世界の地域紛争。北朝鮮であればKEDOの問題とか、中国は日本の領海で海底資源の探査をやっているとか、イラクがクウェート侵攻で湾岸戦争、いろいろな面で、地域紛争がことごとくエネルギー問題に絡んでいるわけです。

まさに、長期的なエネルギー、あるいは電力の安定供給というのは、まさに日本の安全保障の問題でもありますので、ぜひ、日本の技術と政策によって、これ以上原発立地地域を困惑させていただきたくない。むしろこの長計におきまして、明確に核燃料サイクル路線というのを確立していただきたい。そして原発立地地域に安心を与えていただきたいと思います。

最後になりますが、美浜原発でございます。私どもは大変なショックを受けました。タービン、2次系配管が破れて、地元で働いている人たちから11人も死傷者が出まして、地元に変な不安が広がっております。これは原子炉の事故ではなくて、原子炉は止めて冷やして、環境に影響はなかったわけですが、地元の人たちは原子力発電所の全体の設備の安全とか安心を厳しく求めているわけでございます。国は1次系、2次系に関係なく、もっとその部門にも関与して、絶対に二度と、このような大惨事が起きないように、安全、管理体制の確立を強く望みたいと思います。以上でございます。

【中村委員（司会）】

ありがとうございました。石黒さんのご意見でした。

コアメンバーにもお伺いしたいんですけども、やはり、今ご指摘のように、この基本シナリオというのが提示されたというのは画期的なことだったと思うんですけども、やはり全量直接処分というのが非常に衝撃的に受け止められているんだと思うんです。これは政策の選択肢ではなくて、あくまでも評価のツールとしての仮想シナリオなんだということなんですけど、ここがなかなか伝わりにくいと思うんです。

【石黒順二氏】

国としての原子力政策の整合性というものをね、われわれの地域に対してどう説明するのかですね。本当に私、びっくりしたんですよ。なぜこの案がでてくるのかと。

【中村委員（司会）】

こういうシナリオを提示するというのは画期的だったと思うんですけど、でも地元とし

てはそういう受け取り方をされますよね。ですからこのシナリオの位置づけというのを改めて、委員長にお伺いしたいと思います。よろしいですか。

【近藤原子力委員会委員長】

策定会議は、いわゆる原子力長期計画というものを議論しております。これは先ほどご説明がありましたように、5年ごとに、日本の原子力研究開発利用の今後の進め方をどうするかということ、過去の方針に従った活動がどう進んで、どこまで来ているのか、どんな問題が生じているかということ踏まえて、見直して、今後5年間なり10年間はこういう方向にということを決めたいというわけです。

こういう議論をするときには、皆さんそれぞれの組織なりで、営業方針を決めるとか、自治体における方針を決めるという作業をされると思うんですが、その場合に、最初から結論ありきで議論をするというのはたぶん議論じゃないと思うんですね。われわれの置かれた状況においてどういう選択肢があって、その中で現在から将来にかけて、考えられる様々な要素を考慮すると、これがいいのかな、ということで最後に結論というか方針が決まる。それが議論の仕方というふうに考えるわけです。

従って、まどろっこしいとか、いろいろなご批判をいただいておりますが、私どもは、最後に手に入った、あるいは合意された結論について、様々な機会に、皆さんがそれぞれ十分、利害、得失を理解して、周囲の方に説明できる、そういうような政策にしないといかんのかなというふうに考えますと、やはり、様々な可能性について比較検討するという手続きは避けて通れないというふうに考えます。従って、そういう意味で、三つがよい、五つがよい、10のシナリオとかいろいろ議論があるところでありますけれども、時間とそれからそういう当面の選択肢の中で理論的に考えられる組み合わせというものを考えて、この4つの範囲について、利害と得失を検討して、今後われわれはどうすればいいのかということを決める議論をすれば、後で説明しやすいというか、説明能力の高い結論が出るのかなというふうに考えて、作業しているところであります。ですから、ぜひ、とんでもないということをおっしゃらないで、「われわれはこういう視点が重要なんだ、こういうふうなものの見方、こういうことを大事にするんだ、だからこういうことに重点をおいて、国民の目から見るとこういうことが大事だと思う」と言っていたとか、先ほど10の視点というのがありましたが、「このうち、自分たちは経済性こそもっとも重要、今日本の社会にとって経済的なエネルギーであることがもっとも重要なんだ」ということならば、それを言っていたとか、あるいは、「長期的に安定的な供給ができるエネルギーが重要だ」ということならばそのことを言っていたとか、というように、今は、どういう評価の視点が重要かということについて、声を大にさせていただくと、策定会議の委員は、皆さんのそういう声を踏まえて、皆さんの期待に応える適切な選択に至るのかなと思っています。ぜひ、ご辛抱いただいて議論を見守り、ご意見をお寄せいただけると大変ありがたいと思っ

ております。

【中村委員（司会）】

委員長ありがとうございました。石黒さん、そういうことですので、見守りいただきたいということですが、石黒さんの地元としてのご意見は今おっしゃったとおり、たぶん伝わっていると思います。

【石黒順二氏】

はい、よろしくお願いいたしますと思います。

【中村委員（司会）】

コアメンバーの皆さん、いかがですか。石黒さんのご発言に対して。東嶋委員。

【東嶋委員】

石黒さん、貴重なご意見ありがとうございました。お話の中で、全量直接処分に対しては批判されていらっしゃったんですけど、ということは全量再処理に賛成されていると考えてよろしいのでしょうか。といいますのは、エネルギーセキュリティーのことをおっしゃって資源の有効利用という観点から再処理に賛成されているということは分かったんですが、中間貯蔵施設だけで収まるかという話は、廃棄物の量が再処理をすると少なくなるからそちらのほうがいいということで賛成されているんですか。直接処分でなく再処理を選ばれる理由をもう一度教えていただけると助かります。

【石黒順二氏】

核燃料サイクルをやる場合も再処理が絶対条件ですね。日本は余剰のプルトニウムをもたない。それによって再処理しても、MOX燃料にしてできるだけ軽水炉で余分なプルトニウムも減らしていくと。そういう中で、今おそらく青森の再処理施設でも、日本の使用済燃料を全部再処理するというのはできないですね。第二とか第三の再処理施設が必要だと思うんです。そういういろんなシナリオがあると思うんですね。

敦賀にあります高速増殖炉「もんじゅ」が本格的に動き出せば、それはできるだけいらい余剰な核分裂生成物なんか燃やしていきますし、燃料が少なくなってくるのもありますし、2012年くらいから、いわゆる日本人の電気を使う消費量はおそらく減って、その辺でピークアウトして減ってくださるとありますし、先行きが見えない要素が非常にあるわけです。いずれにしても今考えている中では、いわゆる再処理という路線を明確にやらないことには、もうどうしようもなく、全部行きづまってしまうわけですからね。そこから先というのは、まだ見えない要素がいま、原子力政策ではいっぱい残されていると思う。

当面分かっているのは、とにかく今使用済燃料を搬出して青森にできるだけ持って行って、それでもおさまらない分はできるだけ中間貯蔵施設を作って、そこに一時保管していくという選択肢しか、日本としては狭い選択の範囲しか今の段階ではないと思うんです。

もっと先になれば、いろんなシナリオが出てくると思う。ひょっとしたら画期的な代替エネルギー案もでてくるかもしれないですけど、これからはむしろ原子炉が主体になる原子力文明の時代に入るかもしれない。いろんな要素がこれからあるのではないかと考えています。これでお答えになったかわかりませんが、ご理解お願いします。当面は再処理せざるを得ないという状況だということだと思います。

【中村委員（司会）】

地元としてはこのあいだまでは全量再処理以外は聞いたことなかったわけですね。それで今回の策定会議でこういう検討事項がでてきたと言うことでまずショックを受けられたんだろうというのが一つあるとは思いますが、よろしいですか。また後ほどお時間を用意します。

【石黒順二氏】

東嶋さん、地方自治体で使用済燃料を受け入れてくれる自治体があると思いますか。中間貯蔵でも難しいんですよ。高レベル廃棄物の最終処分場なんてもっと難しいんですけど、これどう思いますか。五年や十年でちゃんと実施する自治体があると思いますか。

【東嶋委員】

もう一度質問を言っただけですか。

【石黒順二氏】

最終的に直接処分をする場合は、使用済燃料のいわゆる最終処分場がいるわけですよ。それを受け入れる自治体があるかどうかということなんですよ。ジャーナリストの立場から、そういう地域があるかどうか。

【東嶋委員】

最終処分地を募集しているところですよ。受け入れて下さる自治体があるかどうかはまだ分かりませんが。

ごめんなさい、わたしがさっき石黒さんに質問したのは、石黒さんが再処理に賛成だと言われるその理由は資源の有効利用ということと、それから廃棄物が減るっていう二つのポイントでよろしかったですかということだったんですけど。

【中村委員（司会）】

よろしいですか。また必要なら後ほど。それでは次の発言者をご紹介します。池島芙紀子さんです。池島さんはFAXでお寄せいただきましたFの50のご意見なんですが、入り口のところにこの一枚の紙がありましたのをお気づきでしょうか。これ実は池島さんがお持ちいただいたものですので、あるいはこれにも言及されるのかと思いますのでご参考になさってください。どうぞ。

【池島芙紀子氏】

「ストップ・ザ・もんじゅ」という市民団体の代表をしております池島と言います。核

燃料サイクル政策についてがメインになるんですけども、その前に原子力政策そのものについてもはじめに触れておきたいと思います。

今の条件の策定においても、原子力政策を当然のごとく大前提として、しかも再処理を中心にどうするかという議論が進められていますけど、根本的に今原子力政策がどうなのかとすることを、問い直すときだと思います。世界の情勢から見ても、それから日本が地震の活動期に入っている状況を見ても、様々な状況から考えて、もうこれ以上の原子力依存はやめるときだと思います。むしろ環境面とか経済面でリスクの低い分散型エネルギーに政策変更をすべき時だと思います。

先日の新潟の地震で本当に心配なのは柏崎刈羽の原発ですけれども、余震がまだ続いておりますけども全然止めていないようです。新潟だけではなく、世界がなぜ地震国日本が原子力をそんなに進められるのかと不思議がるほど日本は進めているわけです。今までのところ、幸いにして大惨事までにはいってないけれども、いつどこで東海、東南海あるいは福井、福島、新潟、どこで、原発の立地のあるところで大地震が起こるか分かりません。その場合、原発震災という、未曾有の惨事になるわけです。そのことをふまえてやはりもっとしっかりと今こそ考え、他に道はないのかとすることを根本から問い直すときだと思っております。

2番目に核燃料政策についてですけれども、とりわけ「もんじゅ」について大変不満に思っております。核燃料政策の議論を見ておりますと、「もんじゅ」についての議論がありません。そもそも核燃料サイクル政策の柱になる「もんじゅ」というもの、それが、お配りしました表をごらんになっていただければ分かると思うんですが、毎回の長計ですと計画がのびのびになってきて、原型炉「もんじゅ」のあとの が実証炉で 印は商業炉なんですけれども、ついに2001年の長計で、「もんじゅ」の後の実用化目処が全く消えてしまっているわけです。すなわち実証炉も商業炉も消えて、実用化時期がなくなってしまうわけですね。これは長期計画と呼べるものなののでしょうか。一体「もんじゅ」って今どんな位置づけなののでしょうか。核燃料サイクル政策というのは、「もんじゅ」を動かし、その次の実用化を実現させて、初めて再処理の意味があり、サイクルというものが本来国際的に言われている政策の意義になると思うんですけど、この表で見るようにあるいは現実が示すように、「もんじゅ」は95年のナトリウム火災で止まっています。その後の実用化の目処が全くない中で、本当に核燃料サイクル政策なんて呼べないと思うんですよね。

一番に言いたいことはやはり、原研と統合して一体「もんじゅ」をどうしようとしているのか、単なる燃焼炉なのか、あるいは増殖させるのか。改造工事を進めて運転を再開すると言っていますが、運転再開させれば必ずまた事故を起こしてしまいます。十年間も止めていた巨大なものをまた運転させて一体どうなるのか。本当に今度は大惨事が免れないと思います。再処理にしてもそうですけども、ずっといろんなトラブルや事故を起



こしていると聞きます。そうした再処理にしろ「もんじゅ」にしろ、稼働させて大事故を起こしたとき一体責任は誰がとるのでしょうか。そこを明らかにしてほしいと思います。

やはり国民はただでさえ長引く不況で生活は非常に苦しいです。まして今年は台風だとか地震だとか災害で本当に恐怖や生活苦にあえいでいるというのが現実だと思います。そんな国民の前に50年先なら役に立つかもしれない、だからまだ血税の税金をそそぎ込んで「もんじゅ」だけ研究を続けたい。そういう説明で納得できるのでしょうか。わたしはそんなものに投資するくらいなら、即刻もうその政策はやめて、諦めて、新しいエネルギーの、再生可能なエネルギーにもっともっと力を入れるべきだと思います。以上です。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございます。こんどは「もんじゅ」の位置づけはどうか。おっしゃるとおりの部分がずいぶんあると思いますが、吉岡委員どうぞ。

【吉岡委員】

私は原子力委員会を代表していないわけですがけれども、策定会議の委員でもありますので、「もんじゅ」について質問があったので、若干私の認識を示したいと思います。核燃料サイクル政策について数回に渡って前回まで議論して、次回もそうであるという、そういう流れですけども、「もんじゅ」についてはあまり論じられてはいないというのはその通りであり、しかもサイクル政策の検討が終わってから、研究開発政策のところでは取り上げると言う認識を持っております。というのは1997年の高速増殖炉懇談会において実証炉計画が白紙になって、2000年長計でも実証炉についての具体的なプランは立てないということになって、その流れできています。研究開発の対象ではあるけれども実用化政策という実用商業段階の政策には入らないという認識でありますので、今まで議論されてこなかったというのはある意味当然のことだと思います。

ただ高速増殖炉についてはシナリオ1にあります、空想的な操業プランであり、政策ではないから、こんなの評価してもしようがないと、私が毎回皮肉を込めて言っているんですけど、空想的な操業プランには高速増殖炉という項目が一部登場いたします。また前回22日の新計画策定会議において、とりまとめ素案、第一案というのが事務局から示されて、その中には高速増殖炉が研究開発のテーマとして一つあげられているけれども、「もんじゅ」はあげられていない。そういう扱いだと認識しております。

【中村委員（司会）】

他のみなさんいかがですか？ では、碧海委員どうぞ。

【碧海委員】

質問が三つばかりあります。一つは「ストップ・ザ・もんじゅ」の活動をしていられちゃうと言うことは、すなわち原子力発電そのものを使わない方がいいというお考えなのかということを確認させていただきたいのと、もう一つは池島さんのお宅では一ヶ月何 kWh

ぐらいの電気を使ってらっしゃるか、もしお分かりになれば伺いたいのと、それから分散型エネルギーと言うお話がありましたが、何か具体的に分散型エネルギー源を利用しているかどうか、その三点を伺いたいと思います。

【池島芙紀子氏】

一点目については最初に言いましたように、原子力依存をやめるべきだと思っておりまので、使わない方がよいと思っています。ただし、今すぐ全てというのは当然無理な話で、それをどうしていいかというのは議論があると思います。

それから我が家での一ヶ月というのは kWh は月によって違いますので、値段にしますと大体平均 3500 円くらいです。それから、分散型エネルギーについてですけども、これについては既に色々出ていましたけれども、特に私は今までドイツとかスウェーデンとかデンマークとか、海外からゲストを呼んで学習した中で、日本は森林国なのに、なぜバイオマスにもっと着目しないのか。そこに多くのエネルギーが放置されているし、使われていない。雇用も生むことができるのにもっともっとそこを活用すべきだと思っています。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございます。井上委員どうぞ。

【井上委員】

「もんじゅ」が事故が起きた直後に見学に行ったことがあるんですけれども、池島さんは見学されたことがあるのでしょうか。

【池島芙紀子氏】

はい、今年も見学に行きました。

【井上委員】

そうですか。もう一つお聞きしたいのは、10年も止めていたのを動かしたら事故になるんじゃないかということでしたけど、その事故とはどういうものを想定されていますか。前と同じようなものでしょうか。

【池島芙紀子氏】

いえ、前ぐらいのは本当にラッキーだったと思っています。世界中がやめていった、この表の下にありますけども、やめていった大きな理由は、ナトリウムが制御できない、人間にはコントロールできないということで、諦めたのであって、今度また動かしたら火災ではすまない。地震のこともありますけれども、「もんじゅ」の構造というのはケース量に比べて本当に地震に弱い特別な構造だと聞いておりますので、それも心配です。手前味噌になりますけども、今年「もんじゅ」についてのビデオを独自に作りましたので、その中で学者の方にどういった事故が考えられるかというのを分かりやすく解説してもらっていますが、一番心配しているのは核暴走です。チェルノブイリと同じ核暴走です。

【井上委員】

そのナトリウム事故、その前回では済まない事故、暴走、例えば地震に弱い構造というのがよく分からないので先生方の中でちょっと教えていただけたら。

【中村委員（司会）】

では原子力委員会からよろしくお願いします。簡潔にお願いします。

【近藤原子力委員会委員長】

原子力委員長が説明すると言うのはあまりよくないかなと思うんですけど、ナトリウム制御という言葉が私にはよく分かりませんが、液体金属の扱いが難しいとおっしゃっていると思うんです。液体金属というのはナトリウムとか、マグネシウムとか、実はいろいろなところで使われておりまして、大阪近辺でもたしか尼崎でマグネシウムを大量に扱っている工場の火災事故があったと思うんですけど、そういう意味ではそれ自体一般産業でも使いこなしてきているというふうに思っています。おっしゃった核暴走事故というのは、従来高速増殖炉では炉心が何らかの理由で全部潰れるとすれば、臨界を越えて超臨界になるという性質を持った炉心を使ってきているものですから、そういう事故について検討する必要があるということで、例えば制御棒を2系統にするとか工夫をして、核暴走事故が起こりにくいように設計するわけです。さらに、念のため、そういう事故が起きても環境に著しい被害を与えないことを確認しましょうということで、例えば何らかの理由で本来制御棒が入るべきときに二つの系統とも制御棒が入らないとうことを仮定して、暴走の振る舞いを計算して、それでも環境に放射性物質がでないということ、あるいはこの程度しかでないで収まるようにすることという目標を立てて、それが達成されるような防護装置を設計するということをして、したがってこういうことを考えても、リスクが十分小さいという安全設計の目標を達成していることを確認する、そういう作業を安全評価として行っているわけですが、そのようにして取り上げられているのが、いわゆる核暴走事故というものであります。

【中嶋哲演氏】

「もんじゅ」に関して一言だけ。ご承知のように高裁の判決があって今最高裁にかかっています。みなさん誤解されていると思うんですけど、判決は廃炉までは求めてないんですね。安全審査のやり直しをなさいと。審査のやり方に大いに疑義があるということ。裁判所だって専門家じゃないわけですから、ただ審査過程で裁判官が考えたって不十分だったですねと、いうことでああいう判決がでているわけですよ。ですからその点誤解のないようにされたいと思います。ですから最高裁の判決を待つべきですよ。それからプルトニウム、私は何事も原点にかえってものを考えたいと思っています。プルトニウムというのは長崎原爆の材料になったプルトニウムなんですけど、プルトーという地獄の大王、冥土の王様というのが言葉のルーツなんですね。まさに長崎に地獄をもたらした物質なんで

すよ。超猛毒物質だとか。

【中村委員（司会）】

すいません、ちょっと待って下さいね。飯田さんがまだご発言前なので後ほど。E29番が飯田さんが事前にお寄せくださったご意見です。では飯田さんどうぞ。

【飯田秀男氏】

私は大阪で活動するある消費者団体の事務局長をしております。要点は4つあるんですが、一つはこのシナリオから何かを選べと言われまして、私は四になります。なるというのは積極的になるのではなくて四にならざるを得ないという立場です。その理由はそこに少し書いてありますが、各シナリオともまだ不確実性を多分にもっている。そういう条件の下で試算をされているのではないかと私は思っています。例えばこのシナリオを国民投票にふすというようなことになった場合に、国民はこれで判断できるのでしょうか。判断材料を提供したと言えるのでしょうか。

私は今回の議論というのはこの4つから選ぶという、そういう趣旨の議論ではなくて、エネルギー計画を将来に渡ってどうするのかというそういう視点に立った議論がされなくてはならないというふうに思うんです。そうしますとこの1から4というのがいわゆる原子力政策をどうするのかということにしばってしまっている。そういうふうに私は思います。その意味ではですね、もっと分かりやすい資料、大変苦勞されて十項目の比較表を作られているんですが、これで国民が本当に分かるのかなと思います。それが1つめです。

2つめですが、美浜の事故に関連しまして私が思うことは、原子力発電所の管理手法をこの時期に見直さなければいけないと言うふうに思います。過去何回もこういう事故を経験してきてですね、推進をする行政の中に、管理をする、規制をする部門を抱えているというふうに、こういう構造というのは時代遅れだと思います。消費者団体ですから、食の安全問題に非常に関心を持っていますが、BSEの問題で、評価機関と管理機関を分けました。リスク分析の手法に基づいて食品安全委員会は評価をする。厚労省、農水省は管理をするというふうに明確に分けました。こういう考え方に基づいた原子力行政というものを作るべきだと思います。それが二つ目です。

3つめですが、なおかつこの美浜原発の事故に関連してですが、起こった3号機はまもなく稼働30年になろうとしています。しかし私が驚いたのは、1号機でなく3号機で起こったという事実です。1号機は33年を越えています。関西電力に伺いますと40年運転するつもりだと、いうふうに言われています。流体力学を大学なんかで学んだらですね、あのオリフィスの後に渦ができてその圧力が変わるというのは誰でも分かることで、そのオリフィスの下流部分を計測しないことに気が付かないという安全管理感覚というのはとんでもないというふうに思うんです。稼働直後、いわゆるその機械というのは稼働直後に故障する確率が高くなる部分があるわけですが、稼働し始めて老朽化するにしたがって、

また故障率が発生するというそういうカーブを描くのだと思うのですが、今の老朽化している原発の管理手法を従来の考え方ではなくて、見直すと言うことが今求められているというふうに思います。それが三つ目です。

4つ目ですが、総合的なエネルギー計画あるいはその政策を視野に入れてという話をしたのですが、そういう意味では何人か発言された方がありましたが、原子力発電に固執する必要は僕はないと思います。今現在確かに柱になっていますが、そのことを未来も堅持しなければならない理由はないと思います。再生エネルギーあるいは自然エネルギー等でそれが技術開発、あるいは国民の支持が集まっていくということになるのであれば、それは開発されてしかるべきであるし、今現在ほとんど自然エネルギーに対する補助というのはですね、もう太陽光はうち切られようとしています。そういうことではなくて、デンマークやドイツのように市民が自主的にそういうことに関われるような制度こそ作るべきだと思います。そういう視点に立ったエネルギー政策が求められているのではないかというふうに思います。以上です。

#### 【木元原子力委員】

仮想シナリオになっていまして、この中から一つ選んで決定するというわけではありません。委員長が言われたように、核燃料サイクルに対してもいろいろな考え方がありますよね。だから今、飯田さんがおっしゃったように、出発点は4なんですね。4から今スタートしたんです。今、原点にいるわけで、とにかく核燃料サイクルを導入するかしないかも分からない。けど実際に原子力は動いていて、使用済燃料がでる。それを今後どうするかっていう原点が4のオプションですよ。直接処分するにしてもなんにしても、それを当面、中間貯蔵して冷やさなきゃいけませんから、その中間貯蔵したものを適切な時期にこれを直接処分しようか、あるいは再処理をしようか、あるいはまた別の方法があるのか、そういうことを考えるということで、原点からトレースしてみよう、振り返ってみよう、なぜ原子力を選んだんだろう、なぜ日本は核燃料サイクルという政策をチョイスしたんだろう、その原点に戻って、立ち止まって、ここから考えてみようじゃないかと。いろんなシナリオがあるけれども、検討対象として、まあ大きく4つに分けてみよう、4を含めて。それで今走り出したという経緯がありますので、どれかに一つに決めるためではないということです。それからA3の資料2参考資料は、あんまり評判良くないんですけど、確かに読みにくいし、もう少し分かりやすくしても私はいいと思いますが、かなりこれは書き込みすぎですね。先ほどちょっと申し上げなかったかもしれませんが、策定会議では技術検討小委員会というのを設けて、例えば直接処分、今まで日本はそういうシナリオを持っていませんでしたから、直接処分した場合にコストはどうなんだろうということも考えました。また、処分するときに、例えば使用済燃料を縦に貯蔵するのか、横に貯蔵するのか、深さはどのくらいか、広さはどのくらいか、それも全部徹底的にやりました。

その議事録なりなんなりありますので、お送りしてもいいんですけども、私としてみれば徹底的にやりました。ですから、策定会議の中でも技術検討小委員会の中でも、検討して検討して何らかの方向性を示そうと、やっているわけです。この中でわかりにくいところがあったり、ここが足りないっていうのがあったらぜひご意見お寄せいただきたいと思いますのですが、その中で発言された、あるいは寄せられた意見をこの中に反映させているはずで

す。

それで今、自然エネルギーのお話がありましたけど、そうすると、例えばドイツなんか私も好きですし、妹たちも住んでいるので行きますけれども、自由化の中で自然エネルギーを一生懸命やっているところもあるし、バイエルンの方に行くとかあんまりやっていなかったりする。北の方は風況がいいからやっているって事がありますよね。その中でドイツは原子力をやめるという政策をとりましたが、今電力の30%を原子力が供給しています。やめられないでいるんですね。それをどうするかって聞いたら、徐々にやめて行くけれども、足りない分はフランスから買うっていうんです。そうするとフランスは約80%が原子力発電です。ではドイツとして矛盾がないのかってことを伺ったことがあるけれど、自分の国でやらなければいいんだっていう答えが返ってきて、ちょっとぎょっとしました。でも、たしかに自然エネルギーを一生懸命伸ばそうとしています。

それを日本に置き換えて考えてみると、国の補助金はまだやっぱり新エネルギーには出さざるを得ないと思うんです。だけど、既存の電力側の方に対して、私たちも風力使ってほしいと思うんならばグリーン電力基金って言うのがあるんですよ。月一口500円を電気料金に加えるのですが、正直申し上げて大阪は加入率が低い。そこで一口100円に下げたのですが、それでも伸びないの。口じゃ、そうねやらなきゃねって言うけど、お腹の中ではやらないっていうのがあるのかなと思ったりします。

だから、おっしゃることはよく分かるのでもっと啓蒙しなきゃいけないって事がありますよね。本当に風力でも、私たちは基金に協力して、それでそれを少しでも安定的に供給する方法を考えなければ、今現実的に、自然エネルギーだけでやっていけるなんて誰も思っていないでしょう。だからそのところをどうお考えなのか。どうしたらいいですか。

【飯田秀男氏】

ですから、考え方一つだと私は思います。例えば風力あるいは太陽光のことにしても、日本の買い上げ料金、原価ですね、発電して電力会社に売る買電の価格ですね。これはドイツとは全然違いますよね。ドイツの場合ははるかに高く、そのことによって採算性が計算できて、みんなで集めて出資して市民で立ち上げてもらってやっていけるということが、きちんと見通しが付くんですよ。ところが日本はそういう制度がありません。電力会社が言った単価でもって買い上げてしまうというまだそこに留まっている。そこはそのやっぱり政策として考え直す必要があると思います。

【木元原子力委員】

買い取りを含めて、一定量以上の利用義務みたいな制度とか、そういうものを日本は考えているわけですが、その買い取りの価格をもっと高くしろと言うお考えですか。

【飯田秀男氏】

はい、僕はそうすべきだと思います。そうしないとやっぱり普及しない。だけでも普及すればね、そのことが、実際供給も上がるし、国民の中に、エネルギー問題を身近に考える、そういうことが広まって行くんだというふうに僕は思います。

【木元原子力委員】

そうすると、原子力の場合に経済論争があったけれども、自然エネルギーの場合でも経済論争は大いに起こして、自分たちの責任として高い料金でも選択ということならどうですか。

【飯田秀男氏】

もちろんそういうことはやらなければいけないんだろうと思います。自然エネルギーだから採算を無視してということにはならない。当然そうです。

【中村委員（司会）】

場合によっては消費者がある程度負担しなければならないケースもでてきますよね。

【飯田秀男氏】

そうですね、はい。

【木元原子力委員】

だから国が補助しなくても、国民が高く買い取ってくればそれでいいわけですね。

【飯田秀男氏】

そもそも市民エネルギーの会なんて沢山ありますけど、やはりそういう人たちがやろうという気になるためには、採算が見えるほどに高く買えるという制度をやはりつくらなければならないと思います。

【木元原子力委員】

国も補助金を含めて、原子力に対する予算に匹敵するくらい出しているんです。

【中村委員（司会）】

原子力長計策定のためにというベースがあって、今日は核燃料サイクルについてどう考えるかについてみなさんにご意見を伺ったのですが、飯田さんが言われたように、やはり日本のエネルギー政策の中での原子力、あるいは新エネルギーといいたいでしょうか、再生可能なエネルギーあるいはバイオマスって言うご指摘もある。そういう視点と言うのは常になければいけないわけで、今日は原子力の議論をする日ではありますが、その背景にはやはり日本のエネルギー政策というのはどうなっていくのと、日本のエネルギーどうするのということが国民全体の共通テーマにならなければ、原子力に対する議論というのも

少しいびつなまま進んでいくのかなというのを今日みなさんのご意見伺いながら感じました。

【木元原子力委員】

需要側の方が、やはり需要を制約するという視点がなければだめですね。私は省エネルギー部会もやっているんですけども、省エネルギーといいながら民生、運輸は伸びているわけですね。だから建て前と本音ということがどうもあると感じます。

【飯田秀男氏】

はい、感じます。例えばあの70年代の危機の時に深夜放送はありませんでした。いつの間にか今一晩中テレビはやっています。あれはなぜ復活したのでしょうか。私は放送される必要性がどこまであるのかと疑問に思います。私たちはエネルギーの使い方についてもきちんと考えなければいけないですし、省エネという立場で何ができるのかということも議論しなくてはならないというふうに思います。

【木元原子力委員】

家電製品でも省エネ機器といういわゆるトップランナー方式でね。経済性の高い商品がでてくるからまた使ってしまうという、車もそうですね。

【中村委員（司会）】

なぜか車も排気量の大きいのが売れるということが現実にあって、特に民生の消費と言うのは右肩あがり伸びていくという事実があります。第2部の方では会場からの挙手を中心にご発言いただきますけれども、みなさんにも残っていただいて、第1部の発言者のみなさんにも発言の機会をお与えしたいと思いますので、一応、このあたりで第1部を終わらせていただきます。後ほどまた発言の機会はお与えします。ここで15分ほど休憩を取らせていただきます。ちょっと休憩をとってまたご参集頂きたいと思います。第1部を終わらせていただきます。ありがとうございました。

以 上



## 「第9回市民参加懇談会」 第2部 議事録

日時：2004年10月29日（金） 15：40～17：00

会場：IMPホール（大阪市中央区城見 1-3-7 松下IMPビル）

### 【事務局】

会場の皆様からご意見をお伺いしたいと存じます。ご発言をご希望の方は、挙手いただければ、司会が指名いたしますので、ご足労ですが、お近くのマイクの所まで来ていただき、ご発言をちょうだいしたいと思います。その際には、お名前と、どちらからお見えか、また、できましたらお立場をちょうだいできましたらと思います。なお、多くの方々からご意見をお伺いするために、ご発言は3分をめどに簡潔にお願いしたいと思います。ご発言が3分を超過したところで鈴を鳴らさせていただきます。それではこれから先も、引き続き中村浩美委員、よろしくお願いいたします。

### 【中村委員（司会）】

はい、それでは第2部、はじめさせていただきます。予定通り、会場の皆さんの挙手で進めて参りたいと思いますが、ただ、第1部の発言者の皆さんも、もっと言いたいことがあったということなので、後ほど、できれば時間を作りたいと思っております。

それでは、挙手いただければ私がご指名いたします。ではまず、最初に手をお上げになった、紙を持ってらっしゃる方、お近くのマイクまでどうぞ。お手数ですが、お名前とどちらからおいでかを教えてください。

### 【大島氏】

大阪の大島です。申し上げたいことは多々あるんですけども、3分という制約ですから、2点、これは是非とも思うことを申し上げたいと思います。

まず、先ほど第1部のご発言の中にもありましたけれども、また、策定会議の中でも意見がでておりますが、「直接処分をすると、その使用済燃料の最終処分地をいったいどこが引き受けるんだ。そんなところが日本中どこにあるんだ。」というご意見が出ておりました。これはごもっともです。私は原子力には反対の立場ですが、まったくそう思います。それで、だから現行通り全量再処理がいいんだとおっしゃっているわけですが、これは不思議な議論でして、では、再処理をして生まれる高レベル廃棄物の最終処分場を引き受けるところが簡単に見つかるのでしょうか。それは30年先、40年先、50年先に先延ばしをしているだけであって、その時点で見つかるんですか。しかも、再処理をすれば、高レベル廃棄物だけではありません。実は使用済燃料よりもはるかに膨大な量の低レベル、中レベルの廃棄物が出ます。その処分をどうするんですか。使用済燃料の直接処分もイヤだという人たちが、再処理をした高レベルや低レベルや中レベルの廃棄物なら、「うちいいよ、もってこいよ」というところが、たくさん手が上がると考えてらっしゃるんですか。とても思えません。

これは極めて非現実的なシナリオです。つまり、いずれにしてもゴミの処理を、この核の廃棄物の処理をどうするかというのは、きわめて全国的な課題なんですよ、そのことをどうするかというのは。すぐに処分できるわけではないのですから。今からどうするか議論をしないといけないときです。そうすれば、必ず、最良の選択として、これ以上ゴミの量を増やさないことということに結論は辿り着きます。そうすれば、再処理がいいのか、直接処分がいいのかというのは、コスト以前の問題として出てくるだろうと思います。イギリスの試算では数十倍に膨れ上がるという試算もあります。反原発の市民団体は、十数倍だという試算もしていますが、国の方は、たぶんこの正確なデータを出していないと思います。再処理すれば核のゴミは増えていくわけです。これまで、海外に委託していたから高レベルしか私たちには情報が出ていなかったけれども、実は低レベル、中レベルと膨大な量が出ているということです。

もう一点。その再処理をする路線の正当性の根拠に、高速増殖炉が実用化すればということが理由に挙げられています。これは本当に、けしからんことだと私は考えます。先ほど吉岡委員がおっしゃったように、2000年長計の時点で、高速増殖炉はもはや計画とは呼べなくなりました。にもかかわらず、つまり30年、40年進めているんですよ、高速増殖炉。逃げ水と、吉岡委員がまさに言い得て妙ですけども、近づけば近づくほど、実用化が遠のいている。そんな計画、いまだにこのまま続けるという形で議論もされないで放置され、そのことが再処理をする大義名分に使われている。このロジックはとてもおかしいと思います。私は是非、この高速増殖炉をどうするのかというのは、必ずきちんと政策として、このまま続けるのか続けないのかのための、議論の場というのを、市民も交えて作っていただいて、きちんとした討論がなされるべきだと考えます。以上です。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございました。次のご意見をうかがいます。

それでは、ワイシャツ姿で手を挙げていただいた方。

【長沖氏】

茨木から参りました長沖と申します。仕事は原子力の技術開発に携わっております。私の方から2点ばかり。

私は原子力を選んで核燃料サイクルに賛成しております。将来、エネルギーというのはどんどん世界中で使っていかなければならないということが心配材料になっている。それが発端になって、私は原子力の道を選びました。私のまわりにいる人間も、そういう志を持った人間ばかりです。当然ながら、プルトニウムを扱っておりますが、死の灰とおっしゃいましたけども、そういったものが入っていることを重々分かった上で、じゃあそれをどのように閉じこめるかとか、それが皆さんの生活環境に影響しないようにどのようにどうすればいいかということの日頃頑張っております。

あともう１点は核燃料サイクル政策に関して意見を述べていただくということですが、それについて一言言わせていただければ、先ほど、小林さんでしたか、お話ありましたけども、ボトムアップで意見をどんどん吸い上げてほしいとおっしゃいました。まさにその通りだと思います。安全はやはり、現場の方から声があがるものでございます。安全の言葉をボトムアップであげていくと同時に、政策というものはトップダウンでしっかりとしたものではなくてはならない。策定会議の中、あるいは原子力委員会での議論の中においては、そういった責任感を持って、きちんとやっていただきたいと考えております。以上でございます。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございました。

それでは、はい、あなたですね。横を見ろとおっしゃったのは。お願いします。

【牧野氏】

質問します。兵庫から来ました牧野といいます。

たくさんしゃべってから質問を言いますので、原子力委員会の人、木元原子力委員でもいいですけど、返事してください。

一時、再処理やめるって、私たちちょっと期待したんですけども、新計画策定会議もちょっとまともになってきたかなと思ったんですけど、またなんか、このまま続行で、再処理するような方針が決まるそうですね。今日はガス抜きとかいわれていますけども、経産省の中でもいろいろ反対の声があります。今日来られている方で、第１部に出た人もいますけども、あまりにも知識のなさで発言されていて、本当に恥ずかしいと思います。リサイクルとか何とか言っていますけども、再処理して、プルトニウム取り出して、使い道もないのに、それで、建設費も、最初は６９００億円だったのが、今は２兆円ぐらい使っています。六ヶ所の再処理工場の工場も、ウラン試験にもうすぐ突入しますけども、どれだけさんの工事がやられていたか、水漏れはもう１年も２年もあって、直したと思ったらまた水漏れしたりとか、パッキンがちゃんとなつてなかったりとか、信じられないほどのずさんな工事でした。もし１１月にこの長計が決まり、ウラン試験を青森県知事も受け入れてやったとしたって、青森の再処理工場が事故を起こすのは目に見えています。見学に行かれた阪大や東大の教授とか学者さんも、みんな「何と情けない再処理工場で、事故は起こるであろう」と言われておられます。事故が起こるであろう、止まるであろう、そう分かっていて、そして何のメリットもないところで、いったいどうしてこういう愚かなことが、日本の国で行われているのか。

イギリス、フランスの再処理工場でプルトニウムを取り出して、アイリッシュ海が世界一汚れた海となり、もう本当に、白血病で子どもたちがどんどん亡くなっていており、今度は六ヶ所の子どもたちにその白血病の被害を起こす可能性もあります。そしてクリブ

トンとかトリチウムとか、そういうことも世界の学者が、再処理工場がそういう地球に影響を及ぼすことも論議しています。日本は赤字財政であるにもかかわらず、本当に国の上に立っている人たちは、自分たちの責任で税金を使わないで、六ヶ所の再処理工場も同じことです。

だから、木元原子力委員が原子力委員会の方で、再処理をこれからするために、どういうメリットがあって私たちはするんだということをはっきり言ってください。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございました。

【木元原子力委員】

今それを新計画策定会議で討議していただいております。今日、吉岡さんもいらっやっていますし、井上さんもいらしています。ですから、お読みになりにくいし、完全に書いてないとおっしゃるかもしれませんが、この10項目について対比をして評価をして、これから結論を出すんです。井上さん、何かありますか。そういう方向ですね。吉岡さん、何かありますか。策定会議のメンバーとして。

【吉岡委員】

私は手短に言いたいんですけども、この基本シナリオ表というのは、前も言ったけれども、空想的な操業プランであって、政策についての政策評価をやった上で、政策オプションを決めなければいけないと思っています。その際には、何を指すということはあってもいいんですけど、指すにもいろんなバリエーションが政策としてあり得るし、それがうまくいく場合も、いかない場合もある。いかない場合については、危機管理の対策とか、回避対策とかをとっておく必要がある。そこまで細かい政策の明細を決めた上で、最善のものを選びたいと思っています。ですから、真面目にやりますので、よく見ておいてください。監視をしていただければ幸いです。

【牧野氏】

質問で、メリットを言ってくださいと言ったんですが。

【木元原子力委員】

シナリオ1ですね。簡単に私なりの言葉で言わせていただきますと、直接処分する場合には、そこに処分してしまう使用済燃料の中にはウランとプルトニウムというまだ使える資源が残っている。それを再利用しようということです。また、IAEAからの疑念もありますので、ウランとプルトニウムは、いったんパイプの中では分離しますが、最終にはプルトニウムだけでは持たないという作業をする。また、それは原子力発電と同じように、今の策定会議の中でもいわれていますけれども、CO<sub>2</sub>削減の中で、原子力の有用性というのはうたわれておりますので、それも一つあります。

それから、一次使用のままで埋めてしまった場合に、どういう状況が起こるかというこ

とも評価しました。それは事業主体が考えることではあるかもしれませんが、国の原子力委員会としての評価対象としていろんなことを考えている。それから、私たちがプルトニウムを持っているということに対してのご疑念がたくさんあると思うんですけども、それは原子力委員会は厳然として平和利用に限るとしております。ですけれども、これも国民の考え方ですから、先ほど飯田さんも池島さんもおっしゃってくださったように、自分たちの生活を考えて、もう少し違う暮らし方をする、原子力はいらない、ましてや核燃サイクルいらないという方向に行くのであれば、これも国民の一つの選択であろうということですが、策定会議の中では、4つのシナリオがあって、どのような方向で私たちは地球環境を守り、国のエネルギーの安定供給をはかるのか、地政学的なことで、私たちの国は資源もないし、他から電力の輸入もできないという中で国民の需要を満たすためにはどうしたらいいのか、そういういろんなことをかみ合わせて、策定会議の委員の皆さん方が結論をお出しになる、方向性をお出しになるというのが現段階です。

【中村委員（司会）】

牧野さんは「結論ありきでしょう」とおっしゃっておりますけど、結論は出ていないということです。

恐れ入りますが次の方に参ります。

【スミス氏】

京都から来たスミスです。私は原子力委員会に対して一つ約束していただきたいことと、それから確認したいことの2点あります。

まず1点目は、この「市民参加懇談会」についてです。この「市民参加懇談会」というのは非常にフェアに行われていると思って、私は高く評価します。しかしこれが、長期計画の策定の審議に反映されなければ、まったく意味がないのではないのでしょうか。その審議には、今までまったく反映がないと思います。この資料2のページ3に、「いただいたご意見は新計画の審議に反映する」とはっきりと書いてあります。今まで国民をひどく裏切っていると思います。策定会議の中で、このような「市民参加懇談会」、それと先日、10月20日に青森で行われた、「ご意見を聞く会」で出た意見を審議に反映してください。10月20日も齋藤委員長代理が審議に反映すると約束しています。この約束を絶対に具体的に守ってください。来週の11月1日の審議から守っていただきたいです。その約束を、今日いただきたいと思います。

それから2つ目は、これは確認ですけれども、先日、木元原子力委員からはすでに確認させていただきましたが、原子力委員長からも確認をいただきたいと思います。核燃料サイクル政策は、国民にとって非常に重要な問題です。それと、長期計画の一部であります。ですから、当然、国民の意見を反映しなければなりません。正式に、パブリックコメントを経なければいけません。そして、そのパブリックコメントを経た上で確定されるという

ものですね。先日、木元先生からご確認したのは、核燃料サイクル政策は、長期計画の一部であり、その長期計画の結論は原子力委員会としては、来年の１１月に行うと、その確認を今日、したいと思います。

【木元原子力委員】

その通りですね、近藤委員長。来年中に長期計画はちゃんとまとめます。

【スミス氏】

核燃料サイクル政策も、その一環ですから、それも正式に原子力委員会が決定するのは来年の１１月だということによろしいですね。

【木元原子力委員】

はい、長期計画はそうなります。ですが、核燃サイクル政策については、今、論議を行っています。だから、１１月１日か、１１月１２日か、方向性は出ますよね。だけど、原子力長期計画としては、来年に決定されるわけです。

【スミス氏】

ですから、１１月に方向性は示されるけれども、正式な原子力委員会での決定は、今年ではなく来年の１１月、それでよろしいですね。

【木元原子力委員】

そうです。

【スミス氏】

だから核燃料サイクルも含めて、正式な決定は来年の１１月だということによろしいですね。

【木元原子力委員】

はい、そうです。方向性は示されますけれど。

【スミス氏】

原子力委員会での決定は来年の１１月だということです。

【木元原子力委員】

それ、近藤先生にもお聞きになりますか。

【スミス氏】

はい、お願いします。

【近藤原子力委員会委員長】

ご承知のように、原子力長期計画の中には、先ほどご紹介があった放射線の利用など様々な方針があるわけですが、それを一つずつこなしていく、それぞれのパートパートでもってまとめるという以外に仕事の方法はない。平行して行うという方法もあるかも知れませんが、どこかで一覧しなくてはならない。そうすると、時間は有限ですから、木元原子力委員がおっしゃったような意味で、一つずつの区切りをつけて仕事をしていかざるを得な

い。そのことはご理解いただけたと思います。それを、しかし一方、行政処分をなすときには、パブコメをなささいというのがこの社会で決められたルールであり、しかも国民の関心が高いものですから、パブコメというプロセスを生かしていくかということについては十分考えたいと思います。ただ、エネルギー基本計画のパブコメでは、人気投票のように、ほとんどコピーしたような意見がたくさんくる、市民の方がこういうふうな振る舞いでパブコメをやるとなると、これはちょっと問題じゃないかという議論もありました。そういう議論を踏まえて、我々としてパブコメをどう有効に審議に使っていくのかということとはこれから検討する事項だなと思っております。いわゆる原子力長期計画なるものの最終的な委員会決定は、来年の１２月までにやらなければならないことでありますが、どこでやるか、早くというか、夏がいいのか秋がいいのかということは、そんなことやこれからの審議のペースによって決めるのかなと思っています。

【スミス氏】

核燃料サイクル政策については、国民のパブコメをかけますね。

【近藤原子力委員会委員長】

その部分だけでかけるということはいたしません。

【スミス氏】

パブコメ抜きでは、それも含めて、決定はされないということによろしいでしょうか。

【近藤原子力委員会委員長】

行政手続法を考慮すれば、そうなります。行政処分の根拠となる委員会決定をなすときには、パブリックコメントを経るべしというのはルールと考えていますから。

【スミス氏】

しつこいようですけども、核燃料サイクル政策についての結論は、原子力委員会としては来年になるということによろしいですね。

【近藤原子力委員会委員長】

委員会決定というのはその時になされます。長期計画というものを細切れにして、今日これ決定して、明日これ決定して、という形でやるかということ、そうはしません、ということだと思います。

【スミス氏】

懇談会について、審議に反映させていただけるということによろしいですか。

【近藤原子力委員会委員長】

木元原子力委員がお話しされた方がいいと思いますが、新計画策定会議において、青森ではどういうご意見があってということについてご紹介があり、それから木元原子力委員から、総括的なコメントがあり、かつそこに参加された吉岡委員、井上委員などから自分たちとしてはこういう感触を得たとかこういう発言が心に残ったということをお伝えいた

だき、そして、紙は全部配られました。私どもとしては、しかしその意見というのは、あくまでも策定会議の委員の皆さんにこういう意見があったということを踏まえてご発言いただくことが大事であり、策定会議のメンバー以外にパブリックの意見があるというイスがあってそこに意見を積んでおくということで扱うわけではない。それはあくまでも策定会議の委員の皆さんに国民の関心というのはこういうところにあるんだということを頭に入れていただいて、審議をしていただくという主旨で反映という言葉を使っているということだけは誤解のないようにしていただきたいと思います。

【スミス氏】

でも、先日あったのはまだ反映じゃないということですね。報告だったと思います。

【近藤原子力委員会委員長】

報告されたことによって、委員の方々がこういうことに国民の関心があるんだということ踏まえつつ、審議をするということです。

【スミス氏】

青森の県民は、先日開かれた新計画策定会議では、反映されたと思っていないです。

【齋藤原子力委員会委員長代理】

一つ明確にしておきたいと思います。青森で開催された「ご意見を聴く会」では、はじめにご挨拶したときに、「今日いただいたご意見は、22日の策定会議にご報告申し上げます」と、そう申し上げました。その手続きは、今委員長が説明したとおり、皆さんからどういう意見が出たかというのを2枚ぐらいのペーパーにまとめ、そこに出られていた策定会議のメンバーから一言ずつ付け加えていただいたということです。それにより、策定会議のメンバーが、どういう解釈をし、結果としてどういうものができていくかは、策定会議に任せるわけであって、反映という意味合いが、スミスさんの言ったことが全部入るとか、そういったことではないわけで、こういうご意見がありましたという報告を、客観的に正確にするということを私は約束したわけであります。そこははっきりさせてください。

【スミス氏】

青森のマスコミでは、きちんと反映するということが一面で、何社にも書かれていますし、確実にそのように書かれています。

【中村委員（司会）】

具体的には、審議に報告されて反映されるということですね。

【木元原子力委員】

ですから、「計画を策定のプロセスに」という言葉が入っておりますので、プロセスでいろんなご意見が出てきますので、それを策定会議に反映させているわけです。委員の皆さん方がご覧になって、ああこの意見はこうだね、これはこういう形で評価しようね、というような論議が展開されることを望んでいるわけです。



【中村委員（司会）】

はい、次の方向伺います。一番前にいらっしゃる方。

【高橋氏】

福井県敦賀市から来ました、高橋と申します。

観光関係の仕事をしております。先ほどの意見の中にもありましたが、先日の美浜事故で私の住んでいる近くの方でも怪我をされた方もいらっしゃいます。皆さん、ご存じのように地元の方ばかりです。

私たちは、事故が起こるたびに、俗に風評被害ということで、電話がかかってきて「大丈夫ですか」とか、「大変なことになっていますね」とか、地元のものは別に普通に生活しているのにそういうふうに言われたりします。そういうことで、本当は全国の国民の人たちに、もう少し原子力の状況について深く理解していただきたいんですけども、なかなか生産地と消費地という格差がまだまだあると感じます。

ですから、そういう面での国の取り組みをもっと細かく行っていただけないかと思っております。それから、地元にとっては、やはり、美浜の事故は非常にショックでした。たくさんの方が関係していますし、私たちの身近な人に働きに行っている方もいます。ですから、そういう人たちが安心して働ける、家族の人たちが安心して送り出せる、やはりここに住んでいてよかったなと、そういう企業があって良かったなと、現実の生活の中に原子力というのがありますから、そういう面でのいろんな方策というのをとっていただきたい。何か、犯人扱いするようなこと、関係者の方をそういう目で見たりするのはやめていただきたいなと思います。以上です。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございました。続いてうかがいます。では、今度はこちらの方からうかがいます。ワイシャツ姿の方、どうぞ。

【田川氏】

美浜町から来ました田川と申します。私はサイクル機構の労働組合の若手を代表する立場にあるものです。

私は今、「もんじゅ」で働いておりますが、もともとは大阪出身でありまして、阪神大震災を被災した時は学生で、大阪で被災しております。親戚も神戸におります。その時に一番感じたのは、やはり電気は必要だということです。その時、学生でしたけれども、勉強をして、高速増殖炉による核燃料サイクルが必要だと思い、貧弱な日本のエネルギー問題を解決したいという気持ちで就職しました。私のまわりにいる若者は全員そういうつもりで業務に取り組んでおります。

やはり、これは50年後、100年後の日本のエネルギーの確保というのは必ず必要であるし、それは他人事ではございませんでした。それを解決したいというのがもともとの

志です。残念ながら、9年前に私は学生だったんですけども、就職してもまだ「もんじゅ」は動いていないというのが現状です。

今回長計をつくるにあたりまして、前回、具体的に年数がはずれてしまったんですけども、ぜひ、実用化に向けての年数を復活させていただいて、国が責任を持って、FBRサイクルを完結しないと原子力をやっている意味がないんだという説明をしていただきたいと思います。プルサーマルをいくらやっても、何千年ももつわけではないので、FBRによる核燃料サイクルを完結してこそ、核燃料サイクルの意味があると私は今でも思っています。これからも日本のエネルギー問題を解決したいという気持ちで、業務に取り組んでいきます。

現場で私も働いておりますので、何かあると私たちが直接怪我もしますし、死ぬ可能性も私たちにはあるわけですから、一番安全に注意しているのは現場の我々です。事故をしないように安全に、でも研究開発ですから、これから故障もあるかもしれませんが、そういったことでも外部に影響がないように開発していくつもりでありますので、ぜひ「もんじゅ」を早く再開させて、長計の中にも具体的に年数を盛り込んでいただいて、実証炉、商業炉までの道をつけていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございました。それでは、ちょうど私の真正面の方。

【吉村氏】

敦賀の吉村です。私は、今日は、美浜の事故と、それから「もんじゅ」、2点だけ話したいと思います。

ちょうどあの事故が起こって、当初4名の方がなくなりました。関電の藤社長はですね、亡くなった方の家をまわって、玄関先で手をついて謝っている姿をテレビで見ました。ちょうどその時分に、大阪の本店では、秋山会長が、「いちいち労災事故で、社長が辞めておったんでは、社長の首はいくつあっても足りない」、こういう発言をしたというのが新聞に出ておりました。私はこれを見てですね、「なるほど、企業の性格というものはこういうものか」ということがよくわかりました。

実は、保安院が調査委員会を設けて中間報告を先日出しました。今、要約が出ておりますが、中間報告を読んでもみると、あの事故は、主給水管破断事故であるということを明確にしているわけです。主給水管破断事故というのは、単なる火電で配管が破断したのとは違って、言い換えれば、原子力発電所であっても、2次系であってもそこで破断をすれば、1次系に影響する。だから原子力発電所における事故というものを火電と同一視して考えることは間違いであるということを明確に指摘しているわけです。これが一つです。

それから、私は、保安院に対しても非常に不満に思っています。事故が起こったとき、事前の準備行為として、200名からの人が入っていたんです。ちょうどたまたま、休憩

時間にかかったものですから、中に入っていたのは104名。その人たちが、どこでどういう作業をしていたのか、明らかにしてほしい。そうしなければ、今後の対策がとれないはずです。ところがあの中間報告を見ると、日常的に2次系については入っているのだから、準備工事も一緒だ。だから、いいじゃないか、とこういう言い方なんです。これは間違いだと思うんです。最初が入っていない。そういう準備工事は定期検査に入るときは、すべて原子炉を止めてから入っていた。それがいつの間にか、ずるずるとやりだしたのは、いわゆる電力の自由化問題です。そのことを考えると、これはやはり、日常の見回りと、そういう準備工事はぜんぜん違うという立場をとっていただきたい。そのことを明確にしてもらいたい。そういうことを原子力委員会も、労働者の安全という立場で考えていただきたい。

それから、「もんじゅ」の問題はですね、最初は、敦賀にとっても「もんじゅ」というのはまさに夢の原子炉だったです。しかしそれがいつの間にかこうなってきた原因はどこにあるのか。「もんじゅ」がなぜこうなったのか。後の高速増殖炉の行く末が見えないようになってきたのは何なのか、というところを、やはり根本に帰って、原子力委員会も考えてほしい。世界的にも、もう高速増殖炉の時代は終わったといわれているんです。日本だけがそれに固執をしていくということはどう考えてもおかしいと思います。だから、やはり、方向転換を大胆にやるべきだと、こういう意見です。これだけ申し上げておきます。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございました。それでは、どうぞ。

【菊池氏】

司会の中村さんから目線が合いましたので、指されたと思って立って参りました。田川さんの私は先輩になるわけですが、サイクル機構の菊池で、「もんじゅ」の所長を事故後ずっとやっておりました。現在、敦賀の方におりますが、40年前にプルトニウム利用が人類を救うという信念の下に、高速増殖炉の開発に携わってきたわけです。これは現在も変わっておりません。吉村さんは、「もんじゅ」がこうなったのは、とおっしゃっていますけれども、世界の中で高速増殖炉を止めていることはございません。アメリカも、それから中国なんかまもなく実験炉を完成させるわけです。隣の国でそこまで来ています。アメリカにおいても、原子力発電をやる限り、プルトニウム利用をしなければ将来はないと断言をしているわけです。あとはいつやるかでありますから、これは競争であります。やはり日本が、これからエネルギーを、将来とも安定的に使っていくためには、世界に先駆けてそういう技術を手に入れるということは極めて重要なことだと思っておりますので、原子力委員会では、今度の長計では、もっと明確に出していただきたいというふうに思います。以上です。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございました。それでは、続いて、女性の方、どうぞ。

【里内氏】

大阪から来ました、里内百合子といいます。専業主婦です。

市民参加懇談会ということですから、知識のある方もない方も参加できるんだろうと思って、気軽に応募させてもらいました。そんな中で発言させていただくにあって、少し考えてきましたので、ペーパーを読ませていただきます。

美浜の事故についてなんですけれども、その対策の中に、電力会社間における情報の共有化ということがありました。今頃改めてこのようなことを明確にしなければならないことを、少し残念に思っています。また、原子力は国策なのに、こういうことの調整を、というようなことを国がしていないのか、という疑問を持ちました。それと、不安なことですけれども、予測や予想できないこと、またそれらを超えていろんなことが起きてしまうのが世の常なのであれば、感じたり考えたりできるのが人間の心や体、頭なんだから、伝え合い、語らい合い、知恵を出し合って暮らしていくことがとっても大切だと思っております。原子力事業においても、そういうことが国、事業者、利用者である私たちの間で行われていくことも大切なことのひとつだと感じました。現時点で、今の快適な暮らしを可能にしている大きな力である原子力に、私たちはもう少し多くの関心を寄せなければいけませんし、私たちが的はずれなことをいったときにも、これまで以上に丁寧に対応していただきたいと思います。

そして、第１部と第２部の今までの発言の様子を聞いていて、私はちょっと悲しくなってしまったんですね。話してらっしゃることはとても難しいことなんですけれども、あまり皆さんの中に生きているとか、暮らしているということが感じられなくて、今どうしてこの場に私たちはいるんだろう、ということをもうちょっと考えなくてはいけないんじゃないかなということを思いました。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございました。続いてもう一人、女性の方にまいりましょうか。

【石田氏】

大阪の堺市の方から来ました、石田と申します。環境に対して少し意識を持っていると自負している人間ですが、今日は、一市民として、この核燃料サイクル政策というテーマについて自分なりに考えてきました。今、先ほどおっしゃったご意見と、私も共感する部分が多くございます。一市民として、与えられている情報の中で何かを判断するとしたときに、今、こちらで意見を述べられた方たちと同等の意見を果たして私が言えるだろうか、ととてもとても、そういうふうな高尚な意見を述べるということとはできないんですね。それはなぜできないのだろうというふうに考えてみました。一つは、基礎知識のなさ。こ

ここに立って意見を言う限りは、ネットも見ましたし、いろんな情報も見ました。私自身は原子力発電所も見ています。六ヶ所村も見ています。「もんじゅ」も見ています。そういうふうな形で、恵まれた環境で核燃料サイクルということも知っているつもりでした。でも、その人間であっても、今そちらに座られている方々と同等の意見を述べるということではできません。なぜだろうかというふうにしみじみ考えてみました。

私は、なぜここに来たかというのは、そのこと以外に一つあって、今ここで、電気ついていますよね。この電気、ほとんど若狭から来ているんですよ。そうじゃないですか。それを今考えたときに、私自身もスイッチを入れたときに、核燃料というゴミを出してしまっています。そういうふうに私は考えてきました。一人の人間として、自分が出したゴミをどうやって最終処理しているのか、どうやって処分したらいいのか、この場に来たら指針を聞かせていただけるかなと思いました。だから、市民を参加させるのであれば、市民一人一人が今できること、とにかく一つ一つできることを、少しこうやって意見を集めた後には、こんな意見が出た中で、明日からでも今からでもこのことを一つずつやっていきませんか、という呼びかけを是非、ホームページとか新聞とかでしていただきたいですね。

政策が悪い、方向性が悪いとか何かが悪いというのは私でも言えます。でも、今その問題をこれ以上大きくしないために、では私たち一人一人は何をしたらいいのだろうか。環境問題もそうです。一人一人の人が、そのことを防止することによって少しずつ減って行きます。環境の問題からいきましたら、少し原子力から離れるかも知れませんが、今皆さん方の机の上にあるエビアンはフランスから来ているんです。フランスの岩盤の深いところから、わざわざ空輸されてだと思えます。日本のそのテーブルに来ているんです。おいしい水なら六甲にもありますよ。なぜでしょうか。そういうふうな形で、本当に一つ一つできることをやっているという姿勢が、国政で必要だと思います。そういうふうなことから定義付けしていただく、それから提示していただく。大きな難しいことは、市民は分からないかも知れません。でも一つ一つ、自分はこれができるんだということを言っていただければ、実践できるかと思えます。是非、こういう場はとても必要だと思いますから、どんどんしていただいて、それから出た結論一つ、何か、市民が一つ一つできることを提示していただけたらなと思えます。

それから今出しているこの電気一つ、核燃料サイクルでいえば、100年経たないと処理はできないと思います。100年経って、私は処理できません。100年経って処理してくれるのは次世代の子どもたちです。子どもたちには原子力の教育、どの段階でされているんですか。今、木元さんちょっと教えてください。今の子供たちは原子力をいつ勉強しているんですか。

【木元原子力委員】

教科書も何種類かありますが、私の知る限りでは、小学校の社会科の時間に3年生から

のところと、4年生からのところと、それから5年生になれば理科のところとで原子力が出てきますけれども、教師によって、非常に深く教えてらっしゃるところと、まったくさっさと逃げるところがあって、受け方が違いますね。

【石田氏】

いいとか悪いとかよりも、私は自分で処理ができないのですから、次世代の人たちが正しい判断を持って、それに対して対処できる教育というのを、ぜひ一つの提案としてお願いしたいと思います。長くなりましたが、ありがとうございます。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございました。何もかも、やはりできることから一人一人、市民が実行に移すところからはじめなければいけないというのは、おっしゃるとおりだと思います。長計や日本のエネルギー政策の中に反映してほしいなというのも同感です。

もう少しおうかがいします。目が合いました、はい、トレーナーを着てらっしゃる方。

【大津氏】

僕は奈良から来た大津です。原発というのはだいたい豊かな国でしかやっていないんですよ。だから日本も今原発をやっているのはエネルギーが余っているからやっているんです。原発はぜんぜん、エネルギーの足しにはなっていないんです。消費しかしません。「もんじゅ」が一番いい例です。何kWh発電しましたか。

トヨタ自動車とかホンダの燃料電池を開発している技術者はものすごく真剣ですよ。日本人は、燃料電池とか太陽電池は、世界でトップを走っているんです。これが世界のエネルギー危機を解決する一番の近道です。

高速増殖炉とか原発、貧しい国に輸出できますか。どこが採用しますか。21世紀後半になって、原発が地球上の電気、全部発電していると思いますか。あり得ないでしょう。風力はちょっと日本ではきついですが、雷とか、そういうのは仕方ないです。燃料電池も今大変です。でも、「もんじゅ」が実用化するのと、燃料電池が実用化するのを考えたら、どっちが未来に残るかというのは分かり切ったことです。日本人はすごく優秀です。だから、核燃サイクル機構の人も、燃料電池とか太陽電池の開発に行ってください。もう核燃料サイクルを止めてください。その方が、子どもたちはうれしいです。核廃棄物というのは何万年もつんですか。自分が死んだ後も、そのゴミを誰が管理するんですか。こんなゴミ、どうやって残すんですか。僕、自分の子どもにゴミ処分してくれと残せません。「もんじゅ」とか原発というのは、端的にいうと戦艦大和ですよ。戦艦大和世代の人がすごく多いんです。分散型電源はゼロ戦です。戦艦大和は結局グラマンに攻撃されて沈んだんですよ。戦艦大和は沖縄に沈んだだけで誰にも迷惑かけていません。でも、原発は沖縄に沈んだら地球上に何万年も迷惑かけます。放射能というのはそういうものなんです。

【中村委員（司会）】

他の方のご意見を聞きたいと思います。

【木元原子力委員】

燃料電池すばらしいと思うんですけど、水素を使いますよね。水素は何からどうやって作るか。それだけ教えてもらえますか、大津さん。

天然ガスも化石燃料の一つですよ、CO<sub>2</sub>出しますよね。

【大津氏】

天然ガスから作らないですけど、バイオマスが一番実用化というか、可能性があります。水素はね。日本は資源ない、資源ないっていうんですけど、ものすごく資源持っているんです。どうしてバイオマスの資源をみんな考えないのかなって思います。ウランも日本にないじゃないですか。資源がないというんだったら、原発だって動かないですよ。プルトニウムなんか資源にならないですよ。マイナスエネルギーだって、山地さんが発表しているじゃないですか。原子力委員会に報告も出している。

【木元原子力委員】

山地さんは策定会議のメンバーです。将来はFBRしかないっておっしゃっています。

【中村委員（司会）】

まあ、それはいいじゃないですか。ありがとうございます。大津さんのご意見はちゃんと伺いました。はい、ありがとうございます。

それで、まだあると思うんですが、ちょっと10分ほどください。第1部の方に、もうちょっと言いたかったのに、時間が来てしまったという方がいらっしゃいましたので、簡潔にご発言していただけることをお約束していただければ、ここでちょっと会場の皆さんから、第1部の出席者の皆さんに移したいと思いますが、中嶋さんからどうぞ。

【中嶋哲演氏】

できるだけ簡潔に。

先ほどから働いておられる人、原発を受け入れた地域の方たちの本当に切ない意見がありましたね。老朽化の問題で心配しているんですけど、例えばこういうことが結びつくとも本当に怖いと思っています。

関西電力の原発11基の中で稼働以来、2次系の未点検の箇所が1万1550カ所あるんですけど、今回の事故を介して、点検されたのは276カ所に過ぎないんですね。こういう事実を大阪の研究グループの方が報告されています。

それから、実際に中で働いている下請け業者の方です。およそここには出て来られない人の言葉です。「僕らは原発でしか食っていけない。安全性よりも仕事がないことがつらい。我々は関電の顔色をうかがいながら、何も言わずに働いている末端業者。今の状況が続けば、またどこかで事故が起きる」。9月19日付の福井新聞の特集記事の中の言葉です。

それから、原発を拒んだ小浜市民の生の声をお伝えしたいと思います。ごくごく一部だけお伝えします。大飯の3、4号、巨大原発が増設されたときです。小浜市民は大飯原発から10キロ以内の70%の人口を占めながら隣接扱いをされている。このように原子力行政や、関電さんからの不当な、理不尽な差別を受けています。「子ども、孫の代まで一生死刑宣告を受けたのと同じである。とにかく、止めることをお願いします。これ以上の増設は絶対反対。家の二階からよく見えて、事故なき毎日を祈りよる状態です」。別の人です、「私方ではあまりにも多い若狭地区原発に失望し、一家で移転先も考えている」。別の人、「何年か先、いろんな困ったことが出てきて、その時になって子や孫からこれを許した我々がどれだけ恨まれることか。謝って済むような単純なものではないと思う」。別の人、「金の力で人の心が物言えなくなっているのが悲しい。こんな無力になっていくある町民の住民のようにならないよう、小浜市の良識を示したい」。別の人、「若狭の未来よ、不安がいっぱい。だから子どもたちを他県へ出しておいて、老いたらそちらへ行く、という話を聞いて淋しくなります」。別の人、「中学生の娘が言いました。お母さん、私ら小浜の子は他の県の人と結婚できんね」。別の人、「関電原発労働者が白血病で死亡。住民、子孫に被害のない補償はない」。あと2つだけ、「関西電力なれば大阪の近くに作りなさい」。もう一つ、別の人、「原発を持たぬ、都市での無駄遣い、何とかならないか」。

先程、提案したところですけども、危険不安な仮想シナリオの2つの案に対して、安心安全で希望へ導く使用済核燃料そのものの発生を抑制し、一日も早く脱原発へという、そういう、謙遜して、ともうしましたが、仮想シナリオを、近藤委員長、本当に、例え1回、2回、3回でもいいから、検討してくださいよ。お願いします。吉岡先生にもご意見うかがいたいと思います。

それから、再処理工場の件。イギリスのBNFLというのは国営の会社でしたね。この取締役がおっしゃっています。朝日新聞の記事ですが、「青森県の再処理工場には、我々も設計などで技術協力している。日本は非常に微妙な時期で、燃料を入れる前に様々な問題を解決する必要がある。焦って、全面的に展開するより、1ないし3年かけて安全を第一に考えた方がいい」、ぜひこれを謙虚に受け止めていただきたいと思います。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございます。吉岡さん、一言どうぞ。

【吉岡委員】

脱原発の政策オプションというのは、策定会議で取り上げるべきだと私は申ししてきたし、いずれ取り上げられると思っているんですけども、ただ、最初に審議しているのが核燃料サイクル政策ということであり、これを論じている際の前提条件として、今より原発が二割ぐらい増えて、ずっとそのまま横這いで今後数十年続けてやった場合に、その場合において最適の核燃料サイクル政策は何かという、そういう前提を建ててまず私たちは議論



しているわけです。だから、本来は原発から論ずるべきだというのは論理的順序からすればそういう気もしますけれども、核燃料サイクル政策についての検討が一段落したら、次はやはり、原発政策について議論するのが筋であるし、そこでは将来ゼロというのもオプションとして入るのではないかと、あるいは入れるべきなのではないかと思っております。

【中村委員（司会）】

吉岡委員の個人的な意見と、中嶋さんのご指摘、ご報告をうかがいました。

あと、よろしいですか。指名しますので簡潔にお願いします。会場の方がまだお待ちです。では、佐藤さんからどうぞ。

【佐藤大介氏】

簡単に言います。4つのシナリオを見ても、もっと議論をすべきではないかと思う点が多い。先程、会場の方もいいましたが、直接処分するとどこが受けるか大問題が出てくる。だけど再処理したって高レベル廃棄物をどうするかとか、再処理した後の燃料を使った後をどうするかとか、そういった問題がシナリオに沿って十分に議論されているのかが不安です。対外的な影響、政治的な問題についても議論がされているとは思いません。ですから、拙速に方向性を出すのではなくて、ぜひパブリックコメントはできないかもしれませんが、もうちょっと広範な議論とか、策定会議での議論とか、あと1回や2回で再処理工場についての、核燃サイクルについての方向性を出さないでほしい。もっと議論を深めてほしいと最後をお願いしておきます。

【中村委員（司会）】

佐藤さんでした。では、石黒さん。

【石黒順二氏】

いま中嶋さんがおっしゃったように、どこの地区でも、敦賀であろうが、福井だろうが、いろいろ原子力発電所に反対する人たちはいるわけですし、いまのような意見を持つ方々もたくさんおります。しかし、敦賀の場合でも、少なくとも少しずつ人口が増えてきているわけです。雇用についていえば、いわゆる発電所、協力・関連会社で14%くらい確保されている。だいたい7、8人に1人の割合で、その雇用の場をもっている。とくに発電所はすごく就職したいという方が多い。また発電所の方々と結婚したいという人が多くて、実際にいっぱいカップルが生まれております。そういう面で、一方で非難もありますけれども、一方では確実に原子力発電所ができたことを非常に喜んでいる声もたくさんいるし、原子力発電所を信頼しているという方もたくさんいるわけです。なんか非常に偏った形で言われますが、必ずそういう方々もいるということを認識してほしいと思います。

それと、なぜ私が直接処分に否定的かと申しますと、直接処分といえば現実的な場所の問題と、おそらくどういうふうにするかという技術的な問題のこともこれからだと思えます。中間貯蔵に関しましては、すでにもう発電所でプールで貯蔵したりとか、乾

式キャスクで貯蔵したりとか、技術的に全部検証されています。それから高レベル廃棄物にしましても、量的に非常に少ないですし、それから地下500メートルくらいですか、人工バリアと天然バリアを組み合わせで安定してガラス固化でできるというところまで研究がいつているわけです。それは比較論になるかも知れませんが、直接処分は非常に広い場所が必要であるということと、それから核燃料サイクルは現実的に技術がそこまできているということ、そして、日本は原子力政策をとって30何年間で、現実として使用済燃料もありますし、やはりバーチャルではなくて、非現実的ではなく、現実的にそこまで研究したものをつめていくべきであると思います。確かに高レベル最終処分場の立地はものすごく難しいと思います。しかし、これから技術的な見地をしていく直接処分の場合とでは、比較論としてどちらを選んでいくかという面があると思います。

それから日本は島国であるということを忘れないでほしい。エネルギー供給のネットワークがないわけですね。独自で安定した燃料を確保しなければならないという面があります。とくに自然エネルギーは二重投資になります。陽があたらず、風がない時に、停電にしておくわけにはいかない。発電所は電気を供給しなければならない。ある意味では二重投資で無駄だということも頭に入れていただきたい。ですから、量、安定性、コスト、環境、これをすべて持つ代替エネルギー案が明確にならない限りは、やはり、ある程度、主要電源は原子力エネルギーでやっていかざるをえないというのが私の考え方です。

【中村委員（司会）】

ご意見どうもありがとうございました。飯田さんも簡潔にお願いします。

【飯田秀男氏】

電気事業者をめぐる環境は、規制緩和の中で自由化が先行していますし、来年にはさらにそのレベルが広範に広がります。そういう中で、各電力会社はコスト削減のために非常に苦しい思いをしていると思います。その中で、電力会社が原子力発電所を事業者としての責任において運転をしている立場にいるわけです。原子力によるエネルギー源をうんぬんするというのが国策として、きちんと自由化議論のことも含めてされないと、結果として、事業者に任せてそこに安全性が無視される、軽視をされるということにつながっていく土壌がつくられるのではないかと、というふうに非常に心配をしています。そのことを含めて、策定会議あるいは原子力委員会の中での議論をしていただきたいと思います。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございます。では、池島さんどうぞ。

【池島芙紀子氏】

何人かの発言の中にもあったと思うんですが、私も最初に言いましたように、策定会議の後半の議論ではぜひ「もんじゅ」を徹底的に議論していただきたいということが一つ。それから、先日私どもが4年間かけて一生懸命集めました「もんじゅ」を廃炉にして下さ

い」という要求署名が95万近くになりまして、原子力委員会にお出ししましたが、やはりそういった国民の意向というものを重要視していただきたい。関西で、消費地の関西でという声も何人かがおっしゃいましたが、ぜひもう一度、後半での議論の場を持っていただきたい。この2点ぜひお願いします。

【中村委員（司会）】

はい、ありがとうございます。予定の時間がだんだんなくなってきましたので、このあとは会場みなさんに時間を差し上げるつもりであります。それでは女性の方、黒いセーターにベストを着ていらっしゃる方。お近くのマイクを使って下さい。

【久保氏】

大阪の久保と申します。皆さんのお話を伺っていると、使用済燃料が本当に大変で、もしどこかに引き受けていただくとしても、そんなところはないというお話があって、だから再処理なんだというお話のように思うんです。私はそれを伺っていてすごく不思議に思うですけども。原発が始まってもう30年以上たっていますね。それでいまだに使用済燃料の処分の仕方が決まってない、解決されていない。最初から当然そういうことは考えられて、原子力が進められてきたのではないかと思うのですが、30年たっても40年もたっても決まっていなくて、それをいま再処理だというのもまだ未知数ですよ。これから本当に現実になるかどうか分からない。それが本当に日本は技術が優秀だと言われているんですが、もうそれ自体が信じられない話で、原子力委員会の先生とか、木元さんとか、賢い方は、すごく簡単なことがもしかしたら分からないのかなと思ったりします。

それともう一つですけども、再処理のお値段が年間一軒あたり500円とか600円ですか、それが高いか、安いとおっしゃっていたと思います。新聞に全量再処理すると43兆円という数字が出ましたね。どうなのでしょう、その数字は。それは計算の仕方では数字は変わってくると思いますので、それより高くなることはあっても少なくなることはないと思います。そんなの、とても市民として受け入れられる数字ではないと思います。

【木元原子力委員】

今おっしゃっていることについてですが、日本は直接処分という方法をとらないで、再処理をして、プルトニウムとウランを有効に使うという政策をまず選択しています。直接処分よりも、やはり再処理をして自立をめざそうという方向です。だから、直接処分のための法律もないし、それからきちんとしたルールでどこにどういうふうに埋めるという法律もありません。ですけども、再処理をして、そこで最終的に出る高レベル放射性廃棄物をガラス固化体にして地層に埋めるという法律はできているんです。

【久保氏】

だから、それがそもそもおかしいんじゃないですか。国民の合意は得られていないと思います。そういう形で突っ走ってきたというのがおかしいんじゃないですか。というのが

市民の感覚です。

【木元原子力委員】

それで、今、新計画策定会議でやっているんです。

【中村委員（司会）】

はい、久保さんの受け取り方は今伺いました。ありがとうございます。まだ指名していませんでしたね。

【池野氏】

小浜から来ました池野といいます。パネラー側にも小浜から出ておられます。先ほどからいろいろとありましたけれども、今日の懇談会の一つのテーマである美浜3号機事故ですが、これについても先ほどからいろんな方が発言されております。小浜在住の方が一番多く亡くなられていますし、重体になっておられる方も小浜の方です。とくに若狭の方々は原発で働いておられる方が非常にたくさんいらっしゃいます。そういう方々が非常に不安、そして怒りを感じておられます。そういうことがいろいろと伝わってきています。そういう意味で、先ほど敦賀の方が言われましたが、これだけ重大な事故を起こしながらトップの方は責任を感じておられるのかどうか分かりませんが、トップの座におられる。これが関西の風土かも知れませんし、今日は東京から霞が関からずいぶん大勢みえておられるので、不思議な感じがするのもかも知れません。

前回の22日の新計画策定会議で西川知事が発言していますように、美浜3号機事故の背景ですね。これはもちろん品質管理、品質保証体制が機能していなかった。これは保安院が報告書で指摘している通りです。それとともに原発の老朽化の問題ですね、これがあるという認識が保安院なり国の原子力安全委員会の報告書を見ても、それが無いということで、これは原子力長計の中で老朽化の問題、廃炉の問題、これを取り上げていただきたいということを一つお願いします。美浜1号機、2号機と日本原電の敦賀1号機が廃炉を迎えることになります。廃炉の問題も大変な問題ですから、それを差し置いてプルサーマルとか、再処理ですとかというのは順序が違うのではないかと思います。先ほども発言がありましたように、使用済燃料をどうするかということが、今回の長計での核燃料サイクルをどうするかということの最大の動機であるのではないかと思います。これは長計策定会議の議事録を読みますと、だんだん本音が出てきて、一応エネルギーセキュリティの問題であるとか、リサイクルということを言っていますが、本音は使用済燃料をどうするか、搬出先がほしいということに尽きると思います。

それにつけ加えれば、英仏からの廃棄物の返還ですね。返還先の保管は、六ヶ所村にお願いしていますが、中レベル・低レベル廃棄物が来年あたりから帰ってきます。あと回収ウラン、これが帰ってこざるをえないと思います。使用済燃料の9割が回収ウランです。現実には、電力事業者はこれを使っていませんね。実験レベルでしか使っていません。再

処理をするとリサイクル、リサイクルとパネラーの方やコアメンバーの方が言っておられますが、認識不足もはなはだしいと思います。リサイクルといっても、プルトニウムは使用済燃料の１％以下ですね。そしてほとんどが回収ウランとして残ります。もちろん廃棄物は何十倍という量になります。こういう中で、どこがリサイクルなのかということです。これをやはり考えていただきたい。一つお願いします。

【中村委員（司会）】

ありがとうございました。それではまた正面の方をお願いします。

【松岡氏】

原子力関係のＯＢでボランティアとして「エネルギー問題を発言する会」というメンバーとなっています松岡といいます。美浜発電所の再発防止対策について一事だけ発言させていただきたいと思います。今回の事故は、最初の検査ミスというのは人間がやることですから、完全になくすということは非常に困難なことだと思いますが、その後の修正作業については多くの改善の余地があると思っています。原子力発電所は、日本ではもう５２基、世界では４００基以上が運転しておりますから、いろんなトラブル情報は集められます。それを分析評価しますと、必ず前兆が出てきます。ただし、その前兆の中から非常に重要な類似の事象を選び出して、それが問題かどうかということを選び出すためには、設計の技術者とか、現場の技術者という人たちの非常に高い感性が必要になります。ただし、こういう事故が起こりますと、往々にして検査を強化したり、規制を強化したりします。そういうことは必ずしも、そういう感性を高めるということにプラスにならずに、かえって現場をがんじがらめにして、そういう感性をかえってマイナス面にしてしまうというのが現状だと思います。そういう状態ですから、今回の事故も火力発電所の何百倍も多くの検査をした原子力発電所で起こったということは、やはり単に検査を強化しただけではダメで、やはり技術者の感性を高めるようなことをしなければそういう事故は防げないと思っています。ぜひ原子力委員会にお願いしたいことは、規制を強化したり、検査を強化したりすることではなくて、むしろ大幅に緩和して、現場の技術者とか設計者の伸び伸びと誇りを持って仕事ができるように、なおかつ感性を高めて仕事ができるような環境づくりをしていただきたいと思います。さらにわれわれ国民も文句を言ったり、けなしたりするだけではなくて、コツコツと地道に働いて貴重な電気を作っていたいただいている方々に対して感謝の念を抱くということが非常に大切なことだと思います。早急に原子力委員会の方々にそういう環境の場を作っていただきたいと思います。以上です。

【中村委員（司会）】

ありがとうございました。ご発言の趣旨がやはり長期計画の中にもどこかで反映されることを期待します。まだご意見をお持ちの方もいらっしゃるかと思いますが、時間の方が迫ってまいりました。活発なご意見をお聞かせいただいてありがとうございました。それ

から円滑な進行にもご協力いただいて皆さんに感謝をいたします。今日、お聞きしたご意見については、どうなるかというのは最後に座長に伺って終わりたいと思いますが。

【木元原子力委員】

はい。今日、いただいたご意見は事務方が全部まとめます。そして今度、11月1日に策定会議がありますので、ここにご報告して、そして策定会議の委員の皆様方のご意見をいただいて、策定のプロセスに反映する努力をしたいと思っています。以上です。

【中村委員（司会）】

具体的な審議の中に我々の報告があがるということですね。

【木元原子力委員】

はい。策定会議に報告します。

【中村委員（司会）】

今日、ご協力いただきました皆さんのご意見というのは取りまとめて活かしたいと、市民参加懇談会としては考えております。今日は、皆さんご多用中のところ長い時間にわたって熱心にご参加いただきまして本当にありがとうございました。これで終わらせていただきます。

以 上